
東方護衛録

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方護衛録

【Nコード】

N6328L

【作者名】

流星

【あらすじ】

暁の護衛x東方Projectの二次創作です

人と妖怪が共存する楽園で暮らし朝霧海斗は何を考えるのか

彼は常日頃から求め続けていた平穏から逸脱した世界へと足を踏み入れる

第一話（前書き）

設定の独自解釈及びgodgod展開を多く含んでいます
暁の護衛を知らない人でも読めるようにと思ったのですが…
初っ端から専門用語が（爆）

第一話

―ある日の二階堂邸の一室―

「…暇だな」

この豪邸の主の娘、二階堂家の令嬢である二階堂麗華のボディガードの朝霧海斗は数少ない自由な時間を持って余っていた。

プリンシパル（護衛対象者）である麗華は友人や親しい人物たちを連れて海へ旅行に行っている。

本来ボディガードとはプリンシパルの行動に合わせて随伴し襲い掛かる危機から命懸けで守るのが仕事である、しかしそのプリンシパルがいないのであれば当然海斗の仕事も無くなる。

本来は海斗も旅行に同伴するはずだったが旅行日の前日になって風邪を引いてしまい残ることになった。

中止や延期なんて案もあったのだが楽しみにしていた連中が可哀相だと思い自分の事は気にせず楽しんでこいと言って送り出した。

風邪のほうは麗華たちが旅行に行った当日に治ってしまった。

「書店にでも行くか」

やるせない気持ちを押し殺し本屋に向かうことにした。

海斗の数少ない趣味、そのひとつが読書であるジャンルは問わずS
Fから恋愛、歴史書まで分け隔てなく読んでいる。

「そっぴゃ、なにわ探偵の発売日か」

好きなシリーズ本の最新刊が発売されているとしりっしりっただけ心が踊
るそしてその本を手に取り読みはじめるわりと厚めのミステリー小
説なのだがそんなことはこの男には関係ない。2時間ほど時間を掛
けて熟読し終えた。

その後興味の沸いた本を読んでいるとすでに夕方なっていたので適
当に切り上げて帰ることにする。

約半日ほど本屋で過ごしたのに一冊も買わずに悠々と出口へと向か
う。

店主が泣きそうな声でまたご来店くださいと言った。

「ああ…また来るぜ」

爽やか過ぎる笑顔で言い残し店を出た。

一翌日の二階堂邸―
事件は起こった。

「き、さ、まああああああああ！…！」

二階堂家の主である二階堂源蔵の怒号が響き渡る。

「…これで何回目だ！？貴様が破壊した展示品の数は！？」

「あー…二つ目…いや三つ目?」

「貴様が破壊した数はこれで12個目だ!」

「えへへ」

「えへへじゃない!今度という今度は許さんぞ!ついて来い!」

「ふあいつ…」

「ふあいつじゃないハイだ!それに見ろ!ここにあったゴツホの肖像画、ピカソの大皿、どれもこれも貴様が破壊したんだ!

「壊れるような所に置くからだろ」

「今まで屋敷で破壊した者など貴様以外にいない!」

「なら弁償しろってか?あ?」

「金で解決するなら苦勞はいらん」

源蔵は声を荒げて言い放つ

「クビだ。出て行け、今すぐに!」

「それはあんまりだろ、おいそこの執事の爺さん。庇ってくれ」

「どうかお元気で」

「ちょっとは庇えよ!」

屋敷内での海斗の味方は麗華や彩といった面々くらいである。だが肝心の彼女達も今は旅行中でここにはいない。タイミングが悪すぎた。

「あれ？詰んだ？」

「待ったなしだ」

海斗は自分が置かれている状況を改めて理解した。屋敷から追い出されることは必須である。

二階堂家専属のSPに荷物を渡され屋敷の外へと追い出される。

「旦那様からのお情けだ、有り難く思っただな」

何かがぎっしりと詰まった封筒だった。

中には札束が入っている。

封筒を受け取ると丁寧にガラガラと門まで閉じる。駅前まで移動した海斗は考える。

「マジで追い出されちゃった、どうっすかな…」麗華に連絡するにも携帯がない。

「とりあえず…書店にでも行って時間を潰すか…ん？」

海斗は違和感を感じた。

目の前で屋気楼のようなものが見える。

導かれるように海斗は近づいて行く。
辺り一面が真っ白になったかと思うとそこには海斗の姿はなかった。

「?????」

「どうなってやがる」

気がついたらいつの間にか山の中にいた。

海斗はここに来た原因を考える。

(どう考えてもあの雇気楼みたいな歪みのせいだよな) 馬鹿馬鹿しいそんなことありえるわけがない。
普通の人ならそう考えるだろう。

(この世に0と1000は存在しない)

海斗の持論である、どんな事が起きようともこの世に『絶対』は存在しないのだから有り得ない話ではない、普通ならパニックを起こしそうな状況でも彼は非常に落ち着いていた。
いやこの異常に期待しているといっても過言ではない。

(といっても自分自身がSF小説のような展開に巻き込まれるとは考えもしなかったな、それにしても屋敷をおいだされたり、変なところに飛ばされちまったり散々だな)

「あん?」

山を適当に歩きはじめた海斗の元へ何者かが現れる。

「貴様：人間だな、何が目的で山へ入った」

数人（？）程の何かが立ち塞がる。海斗は生まれて初めて妖怪というものを目の当たりにする。人の姿に翼を持つ異形の者を、妖怪の山に住む下級の天狗。

白狼天狗というのだが海斗は本で読んだ程度しか知識がない、当然といえば当然なのだが

「ああ？何だテメエらバードマンか？」

「質問に答える」

「…」

「貴様の格好：もしかしなくても外来人が、今すぐこの山から立ち去るなら見逃してやる。だからさっさと消えろ」

「…断ると言ったら？」

海斗が言い放った瞬間凄まじい殺気飛ばされる。

相手が妖怪であろうと消えろといわれて簡単に立ち去るような男ではない。

『…？』

白狼天狗たちは凄まじい殺気に圧され身動き一つ出来ない。

まさに蛇に睨まれた蛙といったところだろう

(こいつ…本当にただの人間か！？) 眼前に立つ外来人からは靈力や魔力、妖気などといったものは感じない。

文字通りただの人間だろう。

しかしこれ程の殺気や威圧感、襲い掛かればどのような末路を辿るかは容易に想像出来る。

「お前らが何なのかはよくわからねえが、どれ程の力を持っているのか興味がある」

ニヤリと笑う

白狼天狗たちは威圧感に耐え切れず思わず一步退いてしまう。

彼らは恐怖のあまり逃げ出しそうになるが、自ら奮い立たせ強引に敵に切り掛かろうと抜刀する。

海斗が一步でも近づけば緊張の糸に耐え切れなくなり無理にでも飛び込もうするだろう。

そんな一触即発の空気の中

「な、何をしていますか!?!」

偶然にもこの場面に遭遇した少女の音が響く。

第一話（後書き）

後から気づいたのですがプリンシパルは護衛対象者ではなく、
対象者でした

ほとんど同じだし別にいいよね？

第二話（前書き）

？注意？今回海斗さんがすごく綺麗です（性格的な意味で）

第二話

「な、何をしているんですか!？」

少女の声が響く

「ああ？」

見慣れない格好をした少女が飛びながら近づいて来る。その姿は白と青を基調とした巫女のような服だが、なぜか大きく腋の部分が露出されている。

緑色の綺麗な長い髪には蛙と蛇の髪飾りをつけており、手には御幣が握られている。

現代ではお目にかかる事はないなかなか奇抜なファッションである。

「…守矢神社の風祝か」

目の前の白狼天狗の一人が呟いた。

「なぜはふり？」

海斗でもこの言葉には知識が無かった。

「白狼天狗の方々と…あなたは外来人ですね？」

「外来人？そっぴや、その鳥人間からも同じこと言われたな」

「…!!」

白狼天狗たちが海斗を睨みつけ再びピリピリと張り詰めた空気が漂う。

どうやら鳥人間と呼ばれたのが気に障ったらしい。

「お、落ち着いてください！」

巫女の格好をした少女の声で落ち着きを取り戻す。

「この方は外来人のようですから私に任せてください。皆さんは哨戒任務に戻ってもらっても構いませんよ」

「あなたがそう言うのであれば、ではお願いします」

これ以上関わりたく無かったのだろうか、白狼天狗たちはあっさりと身を引いた。

少女に軽く会釈をするとすぐに飛び立って行った。

「ふう…自己紹介が遅れましたね。私はこの山の神社の風祝の東風谷早苗といいます」少女は一息ついて自己紹介をした。

「…朝霧海斗だ」

「海斗さんですか…よろしくお願いしますね」

「おっ」

「とりあえず神社に向かいますしょう、私に聞きたいこととかたくさんありますよね？立ち話もあれですから」

「ああ、わからないことだらけだ」

早苗は事情を理解しているらしい。

一先ず彼女に聞きたいことがあるので着いていくことにした。

「…」

海斗は辺りの景色に目を奪われていた。

空気が澄んでいて、雄大な大自然には緑と多くの生き物たちが生き生きとしていることが容易に想像出来る。

海斗は以前にも南条家のある辺境の地で自然触れたことがあるがこの自然ほうが遥かに上をいつていた。人間の手が加わった様子は微塵もない。

ずっと周りを見ていた海斗に早苗が気付づいた。

「どうしました？」

「山に入ったのは初めてだったからな、色々と新鮮なんだよ」

「ええっ！？初めてって今まで一度もですか？」

「ああ、根っからの都会っ子だからな」

海斗を知る人物からすればすぐにバレる嘘だが早苗がそんなことを知る由もない。

「それでも普通は一度くらい山に登ったりすると思うんですが…あ、着きましたよ」

あれこれ話しているうちに到着したようだ。

そこには広い境内と立派な神社があった。

「へえ、想像してたのより随分と立派じゃねえか」

「はい、麓の小さくてボロな神社とは違うんです!」

「?」

海斗は早苗の言ったことに疑問を覚えたが大方他にも神社があるんだらうと適当に区切りを付け辺りを見回す。

そんな海斗の様子に早苗が気付き話し掛ける。

「あの海斗さん、もしかして神社に来るのは…」

「ああ…生まれて初めてだ」

先程と同様に興味深そうに辺りを見ていた。

「せっかくこの守矢神社に訪れたのですから参拝してみませんか」

「断る」

「そんな!?!あっさりと即答しないでください!?!」

早苗に何度もせがまれたので渋々承諾する。

「正しい参拝の方法があつてですね、そのやり方は」

「おい、そのくらい知ってるぞ」「え？でも海斗さん神社にきたのは初めてだっけって言ってたじゃないですか」

「知識と経験は別物だ。それに常識だからな」

そう言って拝殿の前に立ち軽く会釈をし、鈴を鳴らす。

「確か賽銭箱に金を入れるんだっけな」

海斗はアタッシュケースから封筒を取り出した。

おもむろに封筒の中に指を入れて適当に中身を全て取り出すと賽銭箱に放り込んだ。

「・・・」

早苗はその光景を見て絶句する。

何事も無かったかのように次の段階へと進もうとする海斗。

「後は二拝二拍そして最後に一拝だったな」

「ちよっと！？ちよっと待ってください！！」

「んだよ、お前がやれって言うからオレはやってるんだぞ」

「いやだっけ、おさい銭が物凄い大金でしたよ！？」

この神社に住む早苗にとって賽銭箱に大金が放り込まれたのだからとても喜ばしいことなのだが、それでも突っ込まずにはいられなかったらしい。

「現金にはあまり興味無いからな…それに」

「？」

海斗は隣に立っている早苗に向き直りその目を見つめる。

早苗は恥ずかしそうに目を泳がせている。

「お前、あの鳥人間共からオレを助けるためにわざわざ来てくれたんだろ？」

あの場所に早苗が現れなかったら間違いなく両者は衝突していただろう。

だが結果的に誰ひとり傷つくことはなかった。

それは早苗の功績に違いない。

「この金はその礼だ、今のオレには金ぐらいしか渡すものがないからな」

「あの…お礼が欲しくて、助けたわけじゃないですから」

早苗はさっきから落ち着きがなく海斗の顔を見てはそっぽ向く、それを繰り返していた。

「オレがやるって言うてるんだから黙って受け取れ…それと遅くなつたが、さっきはありがとな」

海斗はそう言ってほんの少しだけ微笑んだ…気がした。

「えっと、あの、その…ど、ど、どういたしまして」

そういつて早苗は顔を紅くして俯いてしまった。
海斗は拜殿に向き直り二拝二拍そして一拝をする。

「完璧だな」

「…」

頭を下げながら呟く海斗。

早苗はじつと海斗のことを横から眺めている。

「おや、参拝客かい？」

神社の奥から一人の女性が現れる。

真っ赤な服に背中には大きなしめ縄を背負っており、胸元には鏡の
ようなものを付けている。

奇抜さなら早苗よりもずっと上をいつていた。

「あ、八坂様 海斗さんこのお方はこの守矢神社の神様である八坂
神奈子様です」

「神様…だと…」

「その通り、私はこの神社に奉られている神の一人、八坂神奈子よ」

「なるほど…俺の天を突き抜ける信仰心が本物の神を喚んだか」

「信仰心って海斗さん最初に参拝するの拒否したじゃないですか」

「まあでも、あんたからは確かに信仰心を感じるんだけどね」

「…」

「身に覚えがないって顔だねえ、信仰心ってのは神に感謝するってことさ、早苗に感謝してるんじゃないのかい？」

「ああ、だがそれとこれは…」

「早苗はただの巫女じゃない、風祝さ」

「風祝？ずっと思ってたんだがどついう意味だ？」

「簡単に言うと現人神です」

隣にいた早苗が説明した。

「はぁん…」

海斗はようやく納得する。

「ところであんた名前は？」

「朝霧海斗だ」

「海斗か…あんなかなか面白い人間だね」

「面白い？」「外の間人は神や妖怪なんかを頭ごなしに否定するや

つばかりだ…けど海斗は早苗が私のことを神だと言ったとき少し疑ったようだが否定はしなかった」

「私も同じことを考えていました」

早苗も神奈子に同意する。

「白狼天狗たちに迫られても怯えたり驚いたりするどころか逆に威圧しましたし」

「さつきから話に出てくる外の人間とか外来人ってのは何だ？」

二人の疑問には答えず自分の疑問を投げ掛ける。

「そうだね、まずはここがどこなのかを説明しなきゃならないね」

「それを聞くために俺はここまで来たんだが」

「お茶でも煎れるので神奈子様も海斗さんも中へお入りください」
早苗に言われ神社の中へ
居間のような場所へ案内されるとそこには早苗よりもずっと幼そうな帽子を被った少女がいた。

「早苗ーお帰りー」

「ここにいらしたんですか諏訪子様」

「ん？ここらじゃ見ない顔だね」

少女が海斗に問い掛ける。

「当たり前だ、俺ほどのイケメンは世界中を探してもなかなか見つからないぞ。」

「確かにかなりの男前だね」

少女は笑いながら言った。

「諏訪子様こちらは外来人の海斗さんです」

「朝霧海斗だ」

「海斗か、私は洩矢諏訪子だよ、よろしくね」

「おう、よろしくな…ん？守矢？」

海斗は諏訪子の苗字と神社の名前が同じなのに気付いた。

「なかなか鋭いじゃないか、この諏訪子こそがこの神社のもう一人の神よ」

神奈子から衝撃的なことを告げられる。

「マジで？」

「ああマジ」

再び神奈子に確認を取るが本当らしい。

「疑問に思うのも仕方ないか、見た目はどうみても幼女だからね」

「幼女って言うな!!」

神様たちは言い争いのようなじゃれあいのようなことを始めだした。

(本当に神かよ)

海斗がそんなことを考えていると早苗が割って入る。

「お二人とも今はそんなことをしている場合じゃないですよ!!海斗さんに幻想郷のことを説明しないと!!」

「おっと…そうだったね」

〈神様一家説明中〉

「わかりましたか?」「ああ…キングクリムゾンの便利さがよくわかった

「メタな発言は控えてください。それで何か質問とかはありますか

「？」

「いや、大丈夫だ」

幻想郷のこと、人と妖怪が共存する楽園、弾幕ごっこという人とそれ以外が互角に戦うために出来た決闘ルールのこと。そして神奈子たちも外からこつちに引越してきたこと。早苗のように空を飛ぶ人間なんかもいるなど様々なことを教わった。

「それじゃあ私が海斗さんに聞きたいことがあるんですが」

「何だ」

「えっと、海斗さんの家って資産家なんですか？」

「へえ、お坊ちゃんなのかい？」

神奈子たちも早苗の言葉に反応する。

「違う」

「でも、あれほどの金額…それに高級そうなスーツをきてますし

「あの金もこのスーツも貰いものだ」

神様二人は話に着いてこれていないが放置する。

「貰った？」

「お前、二階堂って知ってるか？」

「まあ一応、日本でも有数の資産家ですよね」

「ああ…二階堂家の長女のボディガードをやってたんだ」

「それって凄いことですよ海斗さん！え？やってた？」

「おう、今日クビになった」

「ええー！？」

「住み込みで働いていたんだが追い出されちゃって、その金は源蔵のおっさんからのお情けだそうだ」

「そのようなお金を本当に貰ってしまっていていいんですか？」

「しつこいぞ、俺がやるって言うてんだ」

「あう…」

早苗の疑問は海斗に一蹴される。

（しかし、幻想郷か、とんでもないところに来ちゃったな…ん？）

海斗の頭に一つの疑問が浮かぶ。

「おい、幻想郷ってのは外で忘れ去られた『もの』が辿り着くんだよな？」

「はい、基本的にはその通りです」

「じゃあ俺はなんで幻想入りしたんだ？」

「んー、神隠しって知ってる？」

諏訪子の質問を海斗は考える。

神隠しとは簡約すると突然人が消え、行方不明になることである。

「知ってるが、何の関係があるんだ？」

「よく神隠しをやってるスキマ妖怪ってのがいるんだけど、そいつの能力に巻き込まれたんだと思う」

「空間が裂けてるところとか紫色の異次元とか目玉とか見なかった？」

あの光景はとても印象深く脳裏に焼き付いているためすぐにでもハッキリと思い出せる。

「そんなものは見なかった」

『え!?!』

三人の声が重なる。

「俺が見たのは蜃気楼のようなものだった」

「何か理由があつてに博麗大結界に歪みが起き、海斗さんがそれに

巻き込まれてしまったんじゃないでしょうか？」

「有り得ない話ではないわね、それより海斗」

「あん？」

「自分のいた世界に帰りたいたとは思わない？」

「……正直未練が無いといえば嘘になる。

確かに居場所は失ったがそこで得た人間関係やたった一人の家族を失ったわけではない。

「もし帰りたいたいのであれば、私が外へと通じることのできる博麗神社まで案内します……」

声のトーンが落ちている。

早苗の顔は寂しさに溢れている。

「いや、何の縁があつてかは知らないがせっかく面白そうな世界に来たんだ。何もせずに帰るなんて出来るかよ」

(俺は俺のやりたいようにやるだけだ)

例えどんな世界に来てもそれは変わらない。

他人に何を言われようと海斗の性格と信念は変わりなかった。

何よりこの幻想郷という地に興味があつた。

退屈せずにすみそうだ。

海斗にとって此処に残る理由はそれだけで十分だった。

「じゃあ、まだ此処（幻想郷）に残るんですか？」「おう、此処なら暇になることもないだろうからな」

暗かった早苗の表情が一気に明るくなった。

そんな二人の様子を二柱神は一步離れた場所から眺めていた。

「神奈子の言った通りだね、海斗は本当に面白い人間だよ」

「だろう？普通の外来人なら元の世界に戻せと喚き散らすような輩も少なくないのにアイツは自分から残ることを選んだ。見知らぬ地に訪れても異形の者とも遭遇しても全く取り乱さない冷静な心、自らの信念を貫き通す力強い意思、これほど強い人間は初めて見たよ」

「おーい、海斗ー」

早苗と話していた海斗を諏訪子が呼ぶ。

「なんだ？」

「此処に残るとなると寝泊まりするところに困るだろう？この神社でよければ好きなだけ泊まっていけばいい」

「いいのか？」

「遠慮するような柄じゃないだろ、何よりとんでもない金額の賽銭を貰ったしね」

「そういうこと、あれだけ貰って何もしいなんて神の名折れだよ」

海斗は野宿で生活が出来ないわけではないが神様たちの厚意を無下にするのは気が引ける。

何より根無し草の海斗にとって寝床を提供してもらえるのはとてもありがたい。

「そうか、じゃあ世話になるとするか」

「それじゃ、よろしく頼むよ」

「よろしくね！海斗！」

「よろしくお願いします、海斗さん」

「おっ」

こうして朝霧海斗の幻想郷での生活が始まった。

第二話（後書き）

今回で導入編が終了です

それと今回から台詞の前に名前を追加しました

誰が話しているのかを解りやすくするためなんです…文章が読みづらくなってなければいいんですが

第三話（前書き）

今回海斗さんが活躍

そして相変わらず綺麗な海斗さんです

第三話

海斗の読んだ小説の一文にこんな言葉があった

【習慣とは恐ろしいものである】

海斗「全く、その通りだな」

海斗は起床すると慣れた手つきでスーツを着込んでいた
といつても所持しているまともな衣類は学園の制服かスーツの二種
類しかない

今さら着替えるのも面倒である、それに向こう側では基本的には休
日でもスーツを着ることを義務付けられていたのでこれが海斗の普
段着化している

海斗「服はともかく、腹が減ったな」

昨日は結局夕食も食べずに与えられた部屋ですぐに寝てしまった
何だかんだで疲れてしまったのかもしれない

時計が無いので太陽の位置で時間を確認するしかない

海斗「午前6時…卯の刻つてとこか」時刻がわかったところで居間
へ向かうことにする

すると台所で朝食の準備をしている早苗がいた

海斗「よう、朝早いんだな」

早苗「あ、おはようございます。海斗さんこそ起きるの早いんですね」

海斗「普段はもっと早いけどな」

事実二階堂家の朝食は午前6時からである

早苗「なんか意外です」

海斗「何がだ？」

早苗「海斗さんって朝が弱い人かと思ってました」

海斗「人を見た目で判断するな、俺は二度寝するよりも起きた後布団の中でダラダラと過ごすほうが好きなんだ」

早苗「起きているのなら尚さら質が悪いですよ…朝食ができたのでお二人を起こしてきてもらえませんか」

海斗「その必要はない」

海斗が視線を向けた先にはそのそと歩いて来る二人の神様がいた

早苗「お二人とも起きて来られたことですし、朝食にしましょう」

それぞれ席について食事を始める

メニューはご飯に味噌汁、焼き魚といったまさに日本の朝食である空腹だったこともあり、海斗の箸は進んでいる

早苗「ど、どうですか、お口に合いましたか？」

やや緊張した面持ちで早苗が聞いてくる

海斗「ああ美味いぞ」

海斗の返答に早苗は顔を綻ばせる

諏訪子「早苗の料理が美味しくないわけがない!!」

諏訪子がいきなり声を荒げて叫ぶ

隣にいる神奈子もうんうんと頷いている

早苗「お、落ち着いてください」海斗「これが親バカというやつか」

この神社の二柱神はやたらと早苗を褒めたりおだてたりする

そのせいで早苗の自信が変な方向に暴走してしまい、空回りしてしまつという悪循環になっているようだ

本人たちが気付いているのかは知らないがこの様子から気付いていたらとしても変わらないだろう

海斗「お前も大変だな」

早苗「他人事のように言わないでください…」

(他人事じゃねえか…)

というツツコミは心の中に留めておくことにした

どこの世界でも真面目な人物が苦勞するというのは変わらないようだ

早苗「海斗さん、今日は人里に行きませんか？」

海斗「なんだ唐突に、人里？」神奈子「幻想郷で人間たちが暮らしているところさ、妖怪の山に妖怪あれば、人間の里に人間ありつてね」

妖怪の山以外にも妖怪はいっぱいいるけどねつと神奈子が笑いながら話す

早苗「買い出しに行くついでに海斗さんの寝間着なんかも必要と買ったので」

昨日はYシャツまま寝てしまったので確かに寝間着がないのは辛い

海斗「なるほどな、俺も欲しいものがあつたしな」

早苗「そうですか、朝食後に出掛けましょう」

海斗「おう、お前らは行かないのか？」

神奈子と諏訪子に話し掛ける

神奈子「私達はほら、この神社の神様だからね」

諏訪子「そうそう、ここから離れるわけにはいかないの」

海斗「面倒なだけじゃないのか？」

神奈子「そんな訳無いわよ、私達にはやるべきことがたくさんあるのわ」

諏訪子「私が実務担当、神奈子は営業担当、ちゃんと役割分担して信仰を集めてるんだよ」

海斗「へえ、具体的には？」

『えっ？』

見事に二人（二神）の声が重なる

ここまで追及されるとは思っていなかったのだろう

神奈子「さあて、早速信仰集めに取り掛かるう」と

諏訪子「神様の一日は忙しいからね」

そういつて早々と居間から出ていった

海斗「…逃げやがった」

早苗「まあまあ、ああ見えてお二方ともちゃんとやることはやってるので」

海斗「そうか…」

どうやら二一トではないらしい

早苗「私たちも出掛けましょう」

海斗「へいへい…」

青年&少女移動中…

早苗「ここが人里です」

海斗「へえ…案外賑わってるんだな」

早苗「幻想郷にいる人間の大半がここに住んでいますから」

早苗のような例外を除くと、ここには幻想郷の全ての人間が住んでいる

そして独自の文化を築いている

しかし、科学技術に関しては外の世界に遠く及ばないようで、江戸から明治程度のレベルらしい

早苗「じゃあ最初は…って、あれ？海斗さん？」

しかし、早苗の横には海斗はいなかった

海斗「店の規模は小さいが面白そうな本が結構あるな」

海斗は人里に着いたときに書店を見つけ、勝手に行動していた

海斗「早苗、書店は他にないのか？」

(…)

海斗「はぐれやがったか、まったくしょうがねえなあ」

無論、海斗のせいであることは言うまでもない

海斗「ん？」

海斗はふと目に留まった本を手にとる

海斗「『脳筋でもできる魔法入門』…だと…!?」

海斗は本を開き読みはじめる

そこには簡単な結界の作り方から魔法薬の調合などとどれも入念な下準備さえすれば素人でもできると本には記されていた

途中立ち読みを注意するために近寄ってきた店員を睨んで追い返し、黙々と本を熟読した

パタリと本を閉じて元の場所へと戻す

他の本でも読もうと考えていた海斗だが早苗が探しているのかもしれないと考え一度店の外に出る

しかし、先ほどとは打って変わって平穏な人里の雰囲気ではなく、張り詰めた緊張感が漂っている

(何か事件でもあったのか)

すると海斗の耳に怒号が飛び込んでくる

声の聞こえたほうを見てみると人だかりができていた

その人だかりの先には泣きじゃくる子どもと声を荒げて怒鳴る一人の男がいた

男は子どもの襟首を右手で掴み、左手で黒光りする拳銃を突き付けている

この幻想郷には当然拳銃など存在しない

なので男は海斗と同じ世界から来た外来人ということになる

海斗のいた世界では法律の改正によって昔と比べ銃の入手が非常に容易になった

外の世界の住人なら銃を持っていても不思議はない

今はその銃のせいで下手な行動に出るわけにはいかない

それにここの人間たちは恐らく銃の脅威を理解していないだろう

しかし、周りにいる人々は男の威圧に驚き動くことができないこれは不幸中の幸いというやつだ

今のところはあの男が落ち着くのを待ったほうがいいだろう、と考えていた海斗の考えは打ち碎かれる

海斗の視界に人混みを掻き分け男の元へ行こうとする早苗の姿が目に入った

(あいつ、先走りやがって!!)

海斗も急いで早苗のもとに向かう

男の前に早苗が立つ

早苗「その子をお願いします!」

「うるせえ!!邪魔なんだよ!!どいつもこいつも!」

男は叫びながら銃口を早苗へと向ける

早苗の脚が恐怖で震えた

だが、それも一瞬だけに立ち直った

男はそんなことは関係ないと言わんばかりに引き金を引く

しかし、海斗の拳が男の顔面に突き刺さる

文字通り男は吹っ飛ばされる

早苗「海斗さん!？」

海斗「早苗、そのチビを連れて下がってる」

早苗「そんな危険です!!」

海斗「心配ねえよ、さっさと行け」

そんな会話をしている間に男は起き上がる

そして周りをキョロキョロと見回して持っていた拳銃を探す

海斗「探しものはコイツか？」

海斗は男の持っていた拳銃を踏み付けながら声を掛ける

「デメエ！返しやがれ!!」

海斗「グロツク17か…ハッ、いい趣味してるぜ」

そしてそのまま拳銃を後方へと蹴る

しっかりとセイフティをかけてあるので心配はない

「デメエ…」

男が海斗に向かおうとするが周りにいた何人かが男を取り押さえようとする

しかし、男に向かっていった数人はは全て殴り飛ばされる

その光景を見るに体術に関しては素人ではないのは明らかである

「テメエだけはぶっ殺す!!」

今度こそ男が海斗に向かって突っ込んで行く真正面から顔面を狙ってきた拳を顔を傾げるだけで避け、カウンター気味に男の鳩尾にパンチを叩き込む

「ッゲフウ!？」

男は肺の空気を全て吐き出した

そし遠退いていく意識を必死で押さえ込む

海斗「眠ってる!!」

前屈みになった男の顎へ膝を打ち込んだ

今度こそ男は完全に意識を失った

すると静かに事態を傍観していた周りの人々から歓声の声があがる

『すげえな、兄ちゃん!』

『緑の巫女さんと一緒にいたし、守矢神社の人か?』

『見た見た!?!あの人超かっこよかった!?!/ /』

『うん、ヤバイよね／＼／』

黄色い歓声を無視して人里の責任者に拘束した男の身柄を渡し、地面に転がっていた拳銃グロック17を拾う

海斗「コイツは没収だな、それにしても…」

この銃には縁があるなと海斗が続けようとした瞬間

空から高速で何かが舞い降りた

？「あややや、お見事でした

海斗「あ？」

海斗はいきなり現れた少女に懐疑の視線を向ける

文「申し遅れました、私は文々。新聞の記者をやっております射命丸 文と申します」

海斗「チ チン丸新聞？」早口でまくし立てる文に対してさらっと下ネタで返す海斗

文「文々。新聞です！そんな下品な名前なわけないでしょう！」

海斗「冗談に決まってるだろ、ん？お前の名前の文って『あや』って読むのか？」

文「ええ…そうですね」

海斗「解りづらいから、お前のニックネームは今日から『ブン』な」

ブン「そんな勝手に決めないくださいよ!?!もう名前が変わってる!?!」

海斗「そんなことよりお前何か用があったんじゃないのか?」

文「そうでした…先程の活躍の取材をさせてほしいんです」

海斗「断る。俺は急いでるんだ」

文「早苗さんを探しているんですよね?」

海斗「あん?知ってるのか?」

文「ええ、取材受けてくれるのなら教えてあげてもいいですよ」

海斗「つたく、手短にしるよ」

文「はい、交渉成立ですね」

取材中…

文の取材は予想以上に長く思ったより時間がかかってしまった

海斗「手短にしるって言ったよな?あ?」

文「あややや、すみません？」

今から案内しますのでという文について行く

海斗「今回二回目だぞ、キンクリ使うのは」

文句を言いながら文に着いていくと人里の中でもかなり大きい屋敷にたどり着く

文「早苗さんならこの中にいますよ」そう言って屋敷のなかに入っていく

海斗も文に続く

そして部屋の襖を開ける

部屋のなかには早苗と着物を着た少女が座っていた

早苗「海斗さん!!」

早苗が駆け寄ってくる

早苗「怪我はありませんか!？」

海斗「おう、俺はプロだからな」

早苗は海斗の様子に胸を撫で下ろす

文「じゃあ、私はこの辺で」

文は着物を着た少女に声をかける

?「ええ、ありがとうございます」

文「いえ、取材のついでですから」

そう言い残し文は部屋から出ていった
すると着物を着た少女が海斗に話し掛ける

？「あなたを此処に連れて来るように私が彼女に頼んだんです」

海斗「お前が文に？」？「はい、貴方のことは早苗さんからお聞き
していますよ、朝霧海斗さん」

海斗「はぁん…そういうお前は？」

阿求「私は稗田家の現当主の稗田阿求と申します」

阿求は会釈して、言葉を続ける

阿求「貴方に来てもらったのは他でもありません。今回の騒動で大
きな被害が出なかったのは海斗さんのお陰と聞きました」

海斗「…」

阿求「人里の者の代表してお礼を申し上げます」

阿求は深々と頭を下げた

海斗「俺は礼を言われるようなことはしてねえよ、礼を言うなら早
苗に言ってくれ」

早苗「え？」

海斗たちが話している間ずっと俯いていた早苗が驚く
早苗「そんな私は…何もできませんでしたし…」

海斗「何言ってるんだ」

早苗の表情が暗くなる

早苗「ど…て…か」

早苗が俯いて何かを呟くが聞こえない

「どうして…そんなこと言ってますか!？」

先ほどとは違い大きな声で早苗が言う

「私は…何もできなかったのに」

目の両端には涙が零れる

『…』

その姿に海斗も阿求も黙り込む

彼女は事態を傍観することなどできなかった

男に捕まり泣いていた子どもを少しでも早く救いたかった
だから駆け出して男の前に立ちはだかった

しかし、向けられた銃口の前に恐怖する

それでも彼女は恐怖に打ち勝った、逃げることなどせず子どもを
救うことを考えていた

彼女はただ純粹に優しいのである

他人から見れば偽善や甘さにも見えるだろうが海斗には違った

海斗自身、早苗の優しさに救われたからだ

その早苗の姿はある少女と少しだけ重なって見えた

禁止区域という地獄のような環境で育つたのに人を殺すことをしな
かった一人の少女と

海斗「俺はあの男を黙らせたただけだ」

早苗「え…?」

突然海斗が話し始める

阿求は黙って海斗の話を聞く

海斗「早苗、お前が動いたお陰であのチビも人里の奴らも助かった
んだ」

海斗「お前がアイツの注意を引いていたから俺の奇襲が成功した。
だから俺はアイツを黙らせただけ、此処の奴らを救ったのはお前だ」

だからもつと胸を張れと言って海斗はスーツの袖で早苗の涙を拭った

阿求「海斗さんの言う通りですよ、だから早苗さん自分のことを卑
下しないでください」

ずっと口を閉じていた阿求が言う

早苗「海斗さん…阿求さん…ゴメンなさい、みっともないところを見

せてしまつて」

海斗「気にするな」

海斗と阿求の言葉に早苗は笑顔になつた

阿求「お二人とも今回の件は本当にありがとうございました」

海斗「おう」

早苗「それじゃ私たちはこれで失礼しますね」

そう言つて海斗と早苗は出て行こうとすると阿求に呼びかけられた

阿求「あ、海斗さん」

海斗「ん？」

阿求「もし時間があればまた此処に来ていただけませんか？」

海斗「それなら別に構わねえが…どうしてだ？」

阿求「とても短い時間でしたが、海斗さんはとても親しみやすいお方だということがわかりました。今度はゆっくりと海斗さんのお話が聞きたいので」

海斗「俺の話なんか聞いたつてつまらないぞ」

阿求「いえ、会話の内容はともかく海斗さんとお話がしたいのです」

阿求はにこりと笑顔を浮かべる

海斗「物好きな奴だな、近いうちにまた来る」

阿求「はい、いつでもお待ちしています」

阿求との話を終え、一足先に外に出ていた早苗と合流して二人並んで帰路を歩く

早苗「何の話をしていたんですか？」海斗「別に大したことじゃねえよ」

早苗「…そうですか」

早苗は引き下がったが海斗に疑念の視線を向けている

早苗「海斗さん、今日はありがとうございました」

海斗「なんだ、急に」

早苗「海斗さんは私が人里の人間を救ったって言うてくれました」

海斗「本当のことだ」

早苗「でも私を救ってくれたのは海斗さんです」

早苗は立ち止まる

早苗「だからちゃんと言わせてください」

早苗は満面の笑みで言った

早苗「ありがとうございます！」

海斗「ああ……」

早苗の笑顔に海斗は目を奪われ咳くように返事をした

早苗「でも、私のせいで海斗さんが危険な目に遭いました」「海斗」
そんなこと気にするな」

早苗「でも……」

海斗「お前は今まで通り自分の正しいと思ったことをやればいい」

海斗は思った

彼女にはいつまでも変わらずにいて欲しいと

いつも笑顔でいてほしいと

だから海斗は告げる

海斗「心配するな、お前が無茶をしても俺が護ってやる」

早苗「か、海斗さん／＼／」

海斗「俺のことが信じられないか？」

早苗「頼もしいです、海斗さんがいてくれると／＼／」

早苗は顔を紅くして微笑んでいる

そんな様子を海斗は見ながら決意する

早苗の笑顔と優しさを護り抜くと

第三話（後書き）

阿求と文の初登場です

人里といえはけーね先生ですが彼女の登場はもう少し先です

あつきゅんこと稗田阿求さんですが実は最初彼女をメインヒロインになってもらおうと思ってました

実際ヒロインは早苗さんになってますが…

でもあつきゅんもいろいろと頑張ってもらおう予定です？

第四話（前書き）

今回は執筆するのにもものすごく苦労しました

話の展開とか、MUGENとDQモンスターズジョーカー2にはま
ったりとか…

第四話

「やっぱり早苗は偉い!!」

朝っぱらから諏訪子が大声で叫ぶ

「早苗はやればできる子なんだ、これくらい当然さ!!」

「これで2Pカラーだの、永遠の二番手だなんて言わせません!!」

「…」

人里の騒動の翌日

事件の顛末を知った神奈子と諏訪子が早苗（ついでに海斗）を褒めちぎっていた

早苗は何もできなかったと悔しがっていたのだが海斗の言葉や二柱神のベタ褒めによってやら今ではすっかり開き直っている

（落ち込まれるよりはこっちのほうがマシか）そんなことを考えながらふらりと一人で部屋から出た

海斗は縁側から屋根上に登る

読書するのに良い場所はないかと探して見つけたのが縁側と屋根の上である

境内にベンチなどは無いので外の空気を吸いながら読書が出来る場

所は限られてくる

屋根の上は瓦が敷き詰められているので坐り心地は良くないが風通しが良い

それだけでなく守矢神社は妖怪の山の頂上にあるため屋根の上からは幻想郷が一通り見渡すことが出来る

最高の景色が味わうことができるのだ

少しの間景色を堪能すると腰を下ろし本を開く
そして読書に集中する

そんな海斗の姿を海斗の姿を見つめる者がいた

「あややや、屋根の上に登って何をするかと思ったら読書ですか」

「5分ほど前」

「新聞の配達は…守矢神社で最後ですね」

目的地の守矢神社を目指して空を翔ける

すると文は屋根によじ登っている海斗を見つけた
記者としての本能か、カメラを構えて瞬時に物陰に隠れる

（屋根の上になんかに登って何をするつもりだろう…もしかして何か企んでいるのでしょうか!？）

文はこれから起こることに胸を踊らせていたのだが

(あれは…小説? いや、何かの計画書かもしれない)

目を凝らして見てみると本のタイトルが見えた

(ベルリンの屋根?) タイトルの意味はわからないが間違いなく小説だった

文は海斗が読書しているだけだと知り肩を落とす

(読書するためにわざわざ屋根に登るなんて…)

再び海斗に視線を移す

「しかし、相変わらず絵になる人ですね」

文は呟きながら読書している海斗の写真を撮る

海斗に話し掛けようと思った文だが、その姿に見とれていた

30分が過ぎた頃、パタリと海斗が本を閉じた

その音で呆然と海斗を見つめていた文は我に返る
急ぎ海斗の傍に行く

「おはようございます」

「おう、ずっと監視してたのはお前か」

「あややや、気付かれてましたか」

文は苦笑いを浮かべる

「海斗さんが屋根に登っていくのが見えただで何かやらかすのではないのかと待っていたんですが…」

「見ての通りただの読書だ、せっかく撮った写真も無駄だったな」

「そこも気付いてたんですか。ですが無駄では無いですよ、記事なんていくらでも捏造できますから」

「最低の発言だな、ちなみに今の会話録音しているからな」

「待ってください！！冗談です！冗談ですから！！」

「冗談には聴こえなかったけどな、録音なんてしてないから安心しろ」

「私の記者生命もこれまでかと思いましたよ」

文はそう言いながら何かを取り出す

「これ今日の新聞です」

「へえ…これは昨日の」

「はい、海斗さんの活躍が一面ですよ！！」

「この写真良く撮れてるな」

記者としての志は最低だが腕は一流のようだ

「私が撮りましたから」

「待てよ、お前はあのおとき近くにいたのか？」

「ええ、記者がスクープを逃すわけにはいきませんから」

「じゃあ手伝えよ!!」

「手伝わたら写真が撮れないじゃないですか」

あくまでもネタを優先するようだ

「まあいい、それで用件はこれだけか？」

「そうですね、一応は

「お前、今日暇か？」

「暇ではないですけど」

「釣りに行くぞ」

「いや、暇じゃないと言ったんですが…」

「ここから見えるでかい湖に行きたい」「霧の湖ですか…面白そうだから良いでしょう、海斗さんに着いていくとネタが手に入りそうですし」

「ささっ と行くぞ」

「ところで釣り具はあるんですか？」

「…」

「仕方ない、私の知り合いに借りてきますよ」

そういつて文は飛び上がる

「ここで待っていてください」

「おっ」

凄まじいスピードで文が飛んでいった

「とんでもないスピードだな」

場所は変わりとなる妖怪の家

「はあ… 格好良いなあ」

河童の河城にとりは今朝配られた新聞を見ながら呟いていた
新聞に写っているのは暴拳にでた男を瞬く間に搦じ伏せた朝霧海斗
の姿であった

「そつだ、写真の部分だけ切り抜こうつと」

「それは気に入りませんね、私の新聞をそのように扱つとは」

「じゃ、射命丸さん！？ど、どうしてここに！？」

「釣竿を借りに来たところ、私の新聞を蔑ろにする輩を見つけたものですから」

「そんなつもりじゃないですよ？」

「まあいいでしょう、意外なネタが手に入ったことですし」

「え？」

「まさかにとりが海斗さんに一目惚」

「わー！わー！」

文の言葉をにとりが遮る

「うう…独り言まで聞かれていたなんて…」

「話を戻しますが、釣竿を借りるために来たのよ」

「別に構いませんけど珍しいですね、射命丸さんが釣りなんて「いつもネタばかり探しているのにとりが付け加える」

「知り合いに誘われたからね」

「へえ〜（射命丸さんを誘うなんて物好きな人もいるんだな〜）」

「今失礼なことを考えてなかった？」

「そ、そんなことないですよ。それと先ほどのことは誰にも言わないでくださいよ」

釣竿を借りた恩を阿多で返すわけにもいかないので適当に承諾しにとりの住居から飛び去る

「そういえば射命丸さんを誘ったのって誰なんだろう…ま、いっかそんなことより写真を切り抜こう」と

結局文々。新聞は切り抜かれるのであった

場所は再び守矢神社の縁側

「見合って見合ってはっけよい、のこった!!」

「攻撃こそ最大の防御、一気に押し通す!!」

「懲りない奴だ、ほいっと」

「しまった!背中に張り付かれた!」

「終わりだ」

「ロリと台の上から何かが落ちる

「海斗の勝ちー!!」

「また負けた…私の蛇神丸が…」

神奈子が床を叩いて悔しがる

「俺の闇のサンタクロースに勝とうなんて思わないことだな」

文が飛び去った後海斗は『闇のサンタクロース』を製作していたそれを見た神奈子と諏訪子が面白そうだと言って無謀にも勝負を挑んできたのである

紙相撲対決の結果はご覧の有様

「もう一回勝負しろ！」

「今ので神奈子の24連敗、もう諦めたら？」

「うるさい！仮にも軍神と謳われたこの私が負けっぱなしで終われるか！」

諏訪子と海斗は顔を見合わせて肩を竦める

「こいつ、ギャンブルを抜け出せなくなるタイプだな」

そう呟いた海斗の近くに一つの影が舞い降りた

「海斗さん、お待たせしました」

「思ったより早かったな」

「釣竿なんか持ってどうしたの？」

「海斗さんから釣りに誘われたので」

「海斗が釣りか…」

「悪かったな、似合わなくて」

「いや、少し意外だったってだけだよ」

海斗は諏訪子に疑念を持ちつつも、神奈子に視線を向けた

「文が来たから、俺は行くぞ」

「勝ち逃げかい？」「しつこいなお前も、じゃあ次の勝負で勝った
ほうが勝者だ、ただし!!」

「!?!」

「今日の夕飯のおかずを賭けてもらおう」

海斗は笑みを浮かべながら神奈子に問う

「乗るか？それとも退くか？」

「乗った!!」

「そんな安請け合いしていいの？」

「勝てばいいのよ、勝てば!!」

意気込む神奈子、しかし…

ポト

「海斗の勝ちー!」

「神奈子 今日の夕飯楽しみしてるぜ、文行くぞ」

「はい!」

「いってらっしゃい」

「うう」

移動中…

「へえ…近くで見るとやっぱりでかいな」

霧の湖の湖畔で海斗は周りを見渡す

「あそこにある赤い館はなんだ?」

海斗の視線の先には湖の中央にそびえ立つ真っ赤な館があった

「あれは紅魔館といって吸血鬼とその従者たちの住居です」

「はぁん…」

「行ってみますか？」

「興味ない、それより今は釣りだ」

少しだけ紅魔館を見ていた海斗だがすぐに興味を失い釣りの準備をする

もともと紅魔館にある大図書館の存在を知っていれば今すぐにでも行きたがるだろう

「言い忘れてましたけど、この辺にはよく喧嘩を吹っかけてくる氷の妖精がいるんで気をつけてください」

「妖精？」

海斗は頭の中で妖精の姿を思い浮かべる

それはキラキラと光りながら飛び回る手の平サイズの小さな生き物それが海斗のイメージする妖精の姿だった

まんまピーー・パンのティーンーベルである

「そいつは強いのか？」

「私たち妖怪からすればたいしたことはないですが普通の人間は脅威なので」

「へえ…」

海斗は適当に返事をして竿を始める

「ちなみにどんな恰好してるんだ？」

「青いリボンに水色の髪、青いワンピースを着ています」

「なんか青ばっかだな、あそこにいるチビみたいな奴か」

海斗がどんどん接近してくる子少女に指を刺す

「そうです、背中にある氷の羽が特徴ですね」

『えっ？』

海斗と文が顔を見合わせる

そして、もう傍にまで近づいていた少女を見る

青いリボンに水色の髪、青いワンピースを着て、背中に氷の羽がある少女の姿を見つめる

「海斗さん」

「言わなくていい、どうせあいつが例の氷精なんだろう？」

「はい、その通りです」

「あんたたち、あたいの湖で勝手に釣りするなんていいどきよーね

！！！」

「なんかキレてるぞ」

「いつもこんな感じですよ」

「無視するなー!!!」

妖精が尖った氷が放たれる氷は海斗たちの顔を掠めて後ろの木へと突き刺さった

「おいおい、マジかよ」

「ふふん、あたいの強さにビビってるようね」「へえ、これが幻想郷名物の弹幕つてやつか…」

弹幕ごっこ、スペルカードルールについては聞いていたが実物を見るのははじめてだった

「その人間!!!あたいと勝負よ!!」

「文とやれよ」

「あややや、私ですか」

「俺弹幕とか出せねえから」

「あたいはあなたと勝負したいのよ、天狗になんか興味ない!!」

「私はお呼びじゃないみたいです」

文はそう言っつてカメラを構える

「キッチリと撮影はするので頑張ってください」

「郷に入れば郷に従え、か」

海斗は釣竿を地面に置く

「いいぜ、相手してやるよ」この幻想郷の決闘はスペルカードルールに基づいて行われる

スペルカードルールを制する者は幻想郷を制すると言っても過言ではないほど此処（幻想郷）では多様される方法だ

（実際に体験しておいて損はないだろう）

「そっこーでぶっ飛ばす！！」

そう言うとチルノは一枚の札を取り出す

「氷符『アイシクルフォール』」

チルノが宣言すると同時に氷の弾幕が展開される

（これがスペルカードか…）

海斗は思考しながら踏み出す

氷の弾幕をかい潜りながらチルノの元へ向かう

（思ったより弾の速度も密度もたいしたことはないな）

「海斗さん、ナイスグレイズです」

文が声援を飛ばすが無視する

海斗は情報を整理する

スペルカードは時間制限がある
時間までに回避し続けることで勝利することもできる
しかし、海斗はこの方法を破棄する

「本体を潰せばいいだけのことだ」

海斗はチルノに段々と接近する

(チルノに近づく程弾幕が薄くなってるな)

「こ、こつちに来るなー!!」

チルノの顔に焦り見える

しかし、海斗は止まらない

少しでも余裕が出来れば次のスペルカード発動させる可能性がある
からだ

スペルカードの宣言中には攻撃してはいけないと早苗から聞いていた
おまけにこの距離で発動されると弾幕を一身に浴びてしまう
回避しつつも足は止めずに距離を詰める

「やばっ!?!」

チルノのは自身が既に海斗の射程圏内だということに気づく

「こつなったら次のスペル

「遅せえ！」

チルノがスペルカードを取り出すより先に襟を掴み投げつける

チルノのがゴロゴロと地面を転がる

「うう…まだまだこれから」

全て言い終える前に海斗がチルノの眼前に拳を繰り出し寸止めする
触れはしなかったが拳の風圧でチルノが地面に頭をぶつける

「痛っ！」

海斗が拳を引き、ゆっくりと言い放つ

「お前の…負けだ」

「…」

「流石ですね！！本当に氷精に勝つとは」

「お前、ずっと写真撮ってたのか？」

「はい、これで明日の一面は決まりですね！！」

「俺はイケメンだからな、読者も喜ぶだろう、それより…」

海斗がいつまでも立ち上がろうとしないチルノのほつを見る

「…ぐすん」

「いつまで座ってんだ、ほら立てよ」

「ぐす、うええええええん!!!」

「うお!?!」

「あややや、海斗さん泣かしちゃいましたね、私はネタを見つけたので帰って新聞作りします」

「待て!!!逃げんな!!!」

海斗が止めるも文は行ってしまふ

「グスツ…あたい、何の能力(力)もない…人間に、負けちゃった」

「…」

海斗はしゃがみ込むチルノに視線を合わせる

「負けたくらいで泣くな」

ポケットを手を入れハンカチを取り出す

「ほら、顔を拭け」

「ひぐつ、ふーん!!!」

「おい!!!誰が鼻水拭けつつった!?!」

「落ち着いたか？」

「…（コクン）」

海斗の問い掛けにチルノは黙って頷く

「…あんだ、名前は？」

「朝霧海斗だ」

「海斗は…何でそんなに強いのだ？」

「…」

「紅白や黒白みたいに弾幕や能力も持っていない普通の人間なのに」

チルノの質問に海斗は少しだけ黙る

「チルノ」

「なに？」

「逆に聞くがお前はなんで強さに拘るんだ？」

「見返してやるんだ…あたいを馬鹿にした奴らを」

チルノは妖精の中では圧倒的な力を持っていた
だがそれは妖精に限ればの話、幻想郷にはチルノ以上の実力者は数
多く存在する

同じ妖精からは恐れられ、力のある妖怪たちからは蔑まれる

「強くなったところで何も変わらんとするけどな」

「なんでさ！？もっと強くなれば皆だってあたいのことそんなけーす
るよー！！」

「…チルノ、お前どうして俺がそんなに強いのかって聞いたよな」

「う、うん」

「生きていくためには強くなるしかなかった」

チルノは意味がわからないのか首を傾げている

「俺には確かに力があつた…けどな、俺を憎んでる奴は腐るほど
いても尊敬する奴なんて全くいなかったぜ」

「それでも、あたいは…」

「チルノ、これだけは覚えておけ、いくら強くなったところで近づ
いてくる奴はお前を利用しようとする奴だけだ」

「…」

「チルノちゃん!!」

突然チルノを呼ぶ声が聞こえた

「大ちゃん!？」

一人の妖精が近づいてくる

「もうチルノちゃん!!勝手に飛び出して何してるかと思えば…」

「知り合いか？」

海斗がチルノに尋ねる

「うん!!大ちゃんはあたいの友達!!」

「はじめまして大妖精といいます、それとすいませんチルノちゃんが迷惑かけたみたいで」

「気にするな」

海斗は大妖精を見つめる

「あ、あの」

(何だ、お前のことを思ってくれてる奴がいるじゃねえか)

「チルノ、お前のことを認めてくれている奴が一人でもいるんだ、それでいいじゃねえか」

「でも!!」

海斗がチルノの言葉を遮る

「それに、お前は十分強い」

「あ、あたいが?」

「お前、相手を気にせず喧嘩吹っ掛けてるらしいな、一見馬鹿としか思えない行動だが、お前にしか出来ないことだ」「いいか、強者相手に臆さず立ち向かうことが出来ることがお前の強さだ」

「あたいが強い?」

「良かったね、チルノちゃん」

大妖精はチルノに笑みを向ける

「うん、海斗には負けたけどやっぱりあたいはさいきょーってことね!!」

「チルノちゃん、そこまでは言っていないと思うよ」

「…釣りをする気も失せたとし、帰るか」

「えー!?もつと遊ぼうよ」

海斗の言葉にチルノが抗議する

「釣りを邪魔しといてよくそんなことが言えるな」

「す、すいません」

「なんでお前が謝るんだよ」

なぜかチルノに代わって謝る大妖精

「大妖精」

「何ですか？」

「チルノにはお前みたいな理解者が必要だ、さっきも言ったが何者相手にも臆さないってのはアイツの強さだがそれと同時に弱点でもある」

「弱点…」

「そうだ、だからアイツのことを止められるのはお前だけだ…深く考え込まなくていい、これからもアイツの傍にいてやれってことだ」

「はいっ…!!」

海斗の言葉に元気良く返事をする大妖精

「ま、何かあれば守矢神社に來い」

海斗はそう言って立ち上がる

「あの、ありがとうございます」

「おう」

「海斗ー、また遊ぼうねー」

「気が向いたらな」海斗はじゃあな、と言い残し霧の湖を後にした

ーその夜ー

守矢神社の夕飯時に海斗は霧の湖での経緯を話していた

「へえ、あの氷精に勝ったのかい」

「そ、それより怪我はなかったんですか!？」

「ああ、生憎傷一つついてない」

「私に黙って霧の湖に行くなんて何かあったらどうするんですか!？」

心配そうな表情から一転

急に早苗が怒りだす

「別にいいだろ、何もなかったから」

「海斗、早苗は自分を差し置いて文と一緒に釣りに行ったから怒ってるんだよ」

さりげなく諏訪子が早苗の本音をばらす

「す、諏訪子様!？」

「おい神奈子、どさくさに紛れてなに飯食おうしてんだ？おかずは俺が貰う約束だったろ？」

海斗の目を盗み食事を始めようとしていた神奈子だが

「私のトンカツが」

海斗に見つかりトンカツは徴収される

「海斗さん聞いてるんですか!？」

「わ、悪かった、次からは早苗も誘う」

「私『も』って何ですか!？そんなに鴉天狗と一緒にじゃなきゃいけないんですか!？」

「ち、違う今のは言葉のあやで…」

海斗が弁明するも早苗の機嫌は終始悪いままだった

第四話（後書き）

さ、早苗さんが空気…だと…！？

下手とすると次回も早苗さんの出番がないかもしれません（^- - ^）；

今回はあつきゆんのターンの予定だったのですが早苗さんメインのネタ回にしようか愚考中です

…霧の湖まで行ったのに紅魔館に行かないとかwww

期待してしまった人すいません、でも大丈夫b!!

紅魔館にはめーりんとかフランちゃんとか咲夜さんとかパチュリーとかネタ回にもシリアス回にもできるほど素晴らしい人材が揃っている…ん？誰か忘れているような…ま、いつか

第五話（前書き）

遅くなって本当に申し訳ないです

先週だけでレポートの課題が三つも出るといふ想定外なことがあります
まして？

次回からはもっと早く更新できるように頑張ります

第五話

妖怪の山、時間帯は早朝

海斗は守矢神社の階段をダッシュで何度も往復していた

相当な回数を往復しているにも関わらず海斗の息が乱れる様子はない

誰よりも早く起きてしまった海斗はこれを機にトレーニングを今日から再開しようと思い、階段の登り降りを利用して走り込みを始めたのだ

場所が山の上だということもあり酸素濃度は薄い
トレーニングするには打ってつけの場所だった

本当は山をぐるりと回ってみたかった海斗だが一人で行動すれば山の妖怪に絡まれかねない

守矢神社に住んで今日で三日目だが面識がある妖怪は文一人だけだ
下手にトラブルを起こすと守矢神社と妖怪たちの間に亀裂ができる可能性がある

これ以上迷惑を掛けるのはさすがに気が引けた

「…ふう」

軽く息を吐きだし、海斗は足を止める

相変わらず息は乱れていないが、僅かに汗をかいている

神社の中へ戻ろうとするが誰かが海斗の傍に現れる

「おはようございますー!!」

「おう、新聞か？」

「はい、これです」

文が海斗に新聞を渡す

しかし、海斗は新聞を広げようとせず、その場で丸めて棒状にして文の頭に振り下ろす
スパーン！！と清々しい打撃音が響く

「痛あ！？何するんですか！？」

「昨日のことを忘れたとは言わせんぞ、一人でトングズラしやがって」

海斗は丸めた新聞を握りしめ文を睨みつける

「いや、それは、その」

「言い訳は無用だ」

海斗は文を神社へと連行する

「お前は俺を嘗めてるみたいだからな、少し考え方を改めて貰おうか」

「ど、どこへ連れて行くんですか！？」

「他の天狗を呼ばれたら困るからな、早苗たちはまだ寝てるから俺の部屋だ」

「嫌です！！大人しく着いていったらどんな酷いことをされるか」

途端に文は激しく抵抗する

しかし、海斗には文を逃さない絶対的な武器があった
懐から携帯電話を取り出す

そしてボタンを押すと携帯電話から音声 flowed

『記事なんていくらでも捏造できますからね』

文の音が携帯電話から再生された

「抵抗すれば他の新聞記者にこれを渡す」

「録音してないって言ったじゃないですか!？」

「常に手札（手段）は揃えておくものだけ」

とって海斗は携帯電話を見せ付ける

「安心しろ、大人しくしとけばこの音声は削除しておく」

「本当ですか？」

「ああ、取引に関しては嘘は言わん」

「…わかりました」

そう言うと観念して大人しくなった文を部屋の前まで連行して、海斗は文の顔を見る

「…お前も大人しくしとけば可愛く見えるんだな」

ふと海斗は思ったことを口に出した

「なっ！？／＼／＼」

途端に文の顔が紅く染まり硬直する

そんな文に構わず部屋の襖に手を掛ける

「あ、海斗さん、おはようござ…」

襖を半分ほど開いたときに早苗が現れた

しかし、言葉を言い終える前に硬直してしまった

それもそのはず、早苗の視界に入ったのは文と手を繋ぎ自分の部屋に入ろうとする海斗と顔を紅くしながら手を握り返している文の姿があつた

勘違いされてもおかしくはない状況である

文が逃げないようにと念のため手を握っていたのが凶とでたようだ

海斗は瞬時に早苗が勘違いしているということに気付く

「早苗、言っておくがお前は勘違いしている」

「え？勘違い、ですか？」

「ああ、俺は文に借りていた釣竿を返そうと思って部屋まで連れて来ただけだ」

実際、文も反省していたようなので釣竿を押し付けて帰そうと思っていた

「…じゃあ何故手を繋いでいるんですか？」

「コイツが逃げないようにするためだ、手首を掴んでたらいつの間にかこうなっていた」

「…イマイチ納得できませんが一応は信じることにします」

「そうか」

そういつて部屋に入ろうとする

「あの、海斗さん」

ずっと黙っていた文が声を出す

「あん？」

「…優しくしてくださいね？」

文が俯きながらに言った

しかし、その顔はニヤリと笑っていた

「デメエ！？」

海斗が文を睨みつける

「…海斗さん」

普段の雰囲気とは似ても似つかないゾツとするような声で早苗が話す

「嘘、だっただんですか？」

「ち、違う誤解だ」

「私を騙したんですね？」

早苗は相当怒っているらしく、聞く耳持とつとしない

(今のうちに逃げるとしますか)

海斗がジリジリと早苗に追い詰められている中
密かに文が逃走を試みるが

ガシィッ

「逃がさん!!」

海斗が文の腕を掴む

「離してください!!」

「お前のせいでこんなことになったんだろっが!!」

逃げようとする文と押さえ込もうとする海斗
二人が暴れる

そのせいで早苗の怒りが有頂天を達する

「二人とも…少し…頭冷やそうか…」

秘術「一子相伝の弾幕」光り輝く数多くの弾幕が二人のもとへ放たれる

「俺、この弾幕切り抜けたら新しく買った本を読むんだ」

「あからさまな死亡フラグ建てないでくださいよ!？」

そんな茶番をやっている間に弾幕が直撃した

『ギャー!…!』

「すみませんでした」

「過ぎたことだ、気にするな」

落ち着きを取り戻した早苗に事情を説明し、海斗は誤解を解いた

「全く、酷い目に逢いましたよ」

「テメエのせいだろうが!!」

文句を垂れた文に海斗がすかさずにツッコミを入れる

「そんなことより、神様方を起こさなくていいんですか？」

文が早苗に指摘する

「あつ、そうでした」

早苗が奥へと駆け出して行った

「では私はこれで」「俺が言える義理でもないが朝飯くらい食って
いったらどうだ？」

「いえ、今日は記者としてではなく、鴉天狗としての仕事があるの
で」

「はあん」

「私も記者である前に山の妖怪ですからね」

「妖怪もいろいろと面倒なんだな、それと一つ聞きたいことがある
んだが」

「なんですか？」

「単刀直入に聞くが俺が山を自由に動いてもいいのか？」

文は少し考え込む仕草をして答えた

「厳しいですね、海斗さんは少々警戒されていますから」

この山の天狗と遭遇した場面を考えれば警戒されて当然である

「なら俺が自由に動けるように手を回しとけ、それで今回の件は忘れてやる」

「…わかりました、ただし」

「わかってる、あれは約束通り削除しておく」

「交渉成立ですね!!」

「おう、あとは任せたぞ」

「はい、ではまた」

文は颯爽と飛び立って行った

「これで当分暇潰しには困らんな」

文が飛び立った後、入れ違いになるように奥から早苗が顔を出す

「あれ？文もう帰ったんですか？」

「ああ」

「そうですか、それでは朝食にしましょう」

居間へと移動するとすでに神奈子と諏訪子が席についていた

「海斗、なんで朝っぱらからそんなにボロボロなの？」諏訪子が海

斗の傷だらけの姿を見て尋ねた

「上級者の弾幕ごっこを体験した結果がこれだ」

諏訪子は視線を逸らしている早苗を見て状況を察したようであまり追及してこなかった

この会話を機に一旦話を終えて四人は朝食を食べる

朝食を終えて海斗は縁側で本を読んでいた

「海斗さーん!!」

「あん？」

声の聞こえた方向を見る

すると一人の少女が大急ぎでこちらに飛んできていた

「お前は…大妖精か」

「か、海斗さん、チルノちゃんが…」

「落ち着け、チルノがどうした？」

「紅魔館の奴らをやつつけに行くって言い出して、止めたんだけど言うこと聞いてくれなくて…」

「紅魔館って吸血鬼が住んでる…」

(何考えてんだ!…あの馬鹿!…)

海斗は眉間に皺を寄せてため息を吐く

「あ、あの…海斗さん」

大妖精は心配そうに海斗の顔を見る

「どこだ？」

「え？」

「チルノはどこにいる？」

「はい!こっちです!」

海斗は大妖精に続いて守矢神社を飛び出す

「アイツはもう紅魔館に向かったのか？」

「いえ、海斗さんを連れて来ることを条件に山の麓で待ってもらってます」

「そうか」

大妖精と麓まで降りてきたとき特徴的な青いリボンを付けた少女を見つけた

「チルノ」

「あ、海斗！！」

海斗の姿を見つけたチルノが飛び付く

「あたいと一緒にこーまかんの奴らをやっつけに行こうよ！！」

「チ、チルノちゃん、だからやめておこうよ」

「大丈夫だよ！！さいきよーのあたいに海斗がいれば鬼に厨房だよ！！」

「それを言うなら鬼に金棒だ」

「そんなことより海斗さんから何か言ってください！！」

「チルノ、そんなに紅魔館の奴らを倒したいのか？」

海斗の問い掛けにチルノが大きく頷く

「あたいのことを馬鹿とか弱いとか言うんだ」

「そうか、なら好きにしろ」

「ええ！？海斗さん！？」

大妖精が海斗の言葉に驚く

「けどなお前は何度もそいつらに負けてるんだろ？」

チルノが悔しそうにコクリと頷く

「なら考え無しに勝負挑んだって負けは見えてるだろ」

「だったらどうすればいいのさ？」

「簡単なことだ」

「お前が強くなればいい」

呆気にとられるチルノと大妖精を無視して海斗は続ける

「俺が教えてやる、強者の心構えってやつをな」

第五話（後書き）

今回は紅魔館に突入です（予定）

そういえば、主人公二人とも未だ登場してませんね

そのうち登場するでしょう

第六話（前書き）

前話でもっと早く更新するとかほざいたのに逆に遅くなってる!?

遅くなってホントすいません？

それにしても東方護衛録というタイトルの割には護衛要素が全くないですね

まあ暁の護衛も護衛要素はあまり無かったし

第六話

海斗はチルノと大妖精を連れて守矢神社まで戻ってきた
その姿を神社の境内を掃除していた早苗が見つke、呼びかける

「海斗さんと…妖精？」

「早苗、頼みたいことがある」

「？」

早苗が首を傾げると海斗が顎でチルノを指して

「コイツとスペルカードルールとやらで勝負してくれ」

「えー！？海斗が教えてくれるんじゃないの？」

「俺はスペルカードで勝負しているところを見たことねえから教えようがないだろ」

海斗はチルノと戦ったが単純に地面に叩き伏せただけである

強引な力技で押し切ったので美しさにも重点を置いているこの決闘方法から考えると微妙な勝利と言わざる得ない

「どうして私がこの子と勝負するのですか？」

「強くなりたいんだとよ、いきなり神奈子や諏訪子は荷が重いだからな」

「早苗はチルノ達のことを知ってるみたいだな、お前は早苗のことは知ってるか？」

「知ってるよ！！弱いほうの巫女だよな」

「チ、チルノちゃん！？それは失礼だよ」

「…」

大妖精が慌てふためくなか早苗は固まっていた

「いきなり早苗を怒らせてハードルを上げるとは…気合い入ってるな」

「チルノちゃんは何も考えてないと思いますけど…」

だろうな、と大妖精の言葉に同意しつつ早苗のほうを向く

「頼めるか？」

「ええ、本気を出しても構わないんですよね？」

「ああ」

海斗が早苗の質問に答えると二人はすぐに戦闘体制に入る

「サイキョーのあたいが弱っちいほうの巫女に負けるわけがないもんね」

「相変わらずそんなことばかり言って…」

早苗は軽く微笑むが目は笑っていないかった

二人は同時に構えるとすぐに動き出す

チルノが先に氷の弾幕で攻撃を仕掛ける

早苗は弾幕が来ることがわかっていたかのように紙一重の距離で弾幕を避ける

チルノが間をおかずにスペルカードを宣言する

氷符「アイシクルフォール」

海斗はチルノと早苗の対決を見ながら一つの結論に至っていた

「…同じだ」

「え？」

海斗が呟いた言葉に隣で見ていた大妖精が反応する

「俺に襲い掛かってきたときと全く戦法が変わってないな」

そして早苗はアイシクルフォールの穴であるチルノの真正面に向かう

「これで終わりです」

そして安全地帯である正面から弾幕を浴びせた

「容赦ねえな…」

「チルノちゃん大丈夫？」

大妖精がチルノのもとに駆け寄り心配する

「もう一回ー!!」

チルノは勢いよく立ち上がり再戦を申し込んだ

海斗と早苗は顔を見合わせる

「もう一度してあげたほうがいいんでしょうか？」

「お前さえ良ければな」

その後何度も勝負を繰り広げるがチルノが勝つことは一度も無かった

「ほら、使えよ」

海斗は早苗にハンカチを差し出す

「ありがとうございます」

「…悪いな、こんなことやらせちゃまって」

「いえ、でもどうしてあの子の手助けを？」

「別に深い意味はない、ただアイツのやるうとしてることが面白そうだったからな」

「本当にそれだけですか？」

「あ？」

「海斗さんは「かいとー！！」」

早苗が言葉を遮りながらチルノが海斗に飛びつく

「おっと、もう復活したのか」

「うん！！だってあたいはサイキョーだもん！！」

海斗に受け止められたチルノはニツコリと笑いながら答える

「大ちゃんもこっちにおいでよ！」

海斗の膝の上に乗っていたチルノが大妖精を呼ぶ

「でも海斗さんに迷惑になるし……」

「大妖精ちゃんのいうとおりですよ、チルノちゃんも海斗さんから離れてください」

「嫌だ！！」

「離れてください!!」

早苗がチルノを無理矢理引き離そうとするがチルノもそれに抵抗する
しかし、海斗にとっては堪ったものじゃない

「こんなところで暴れんな!!」

このことがきつかけとなり弾幕勝負の第二ラウンドに突入すること
になった

「チルノの真正面にできる穴をなんとかしなけりゃ勝機は見えない
な…」

「そうですね、それが原因でいつも負けちゃいますから」

「…お前はやらないのか？幻想郷（此処）ではあれが流行ってるだ
ろ？」

海斗は話ながら弾幕を撃ち合う早苗とチルノを指す

「弾幕ごっここに限らず、こついう争いごとは苦手なんです」「一応
弾幕は出せるんですけどスペルカードは一枚も創ってませんし、そ
れに私はチルノちゃんとは違って弱いですから」

「弱いかどうかはともかく、癒し系のお前にはこんな荒っぽい遊び
は似合わないな」

そう言つて海斗は大妖精の頭の上にポンと手を乗せる

「…／／／」

そして肝心の弾幕勝負を繰り広げる二人は予想通りの結果で決着が着いた

「やれやれ、また負けたか」

「でもチルノちゃんも少しずつですが早苗さんの弾幕に慣れてきます」

「もう充分だな、そろそろ教えてやるか」

そう言っつて海斗はチルノの傍に行き、語った

強者の心構えを

翌日

「しかし、近くで見ると結構でかいな」海斗とチルノ、大妖精の三人（？）は紅魔館まで来ていた

チルノは目的を果たすため、大妖精はいつも通りの付き添い、海斗はチルノにせがまれ乗りかかった船ということで一緒に来た

紅魔館を見渡していた海斗の目に門柱に寄り掛かって眠っている女性が目に入る

「おい、誰かいるぞ…寝てるが」

「あの人は紅魔館の門番です」

「門番か…どうすんだ？」

「倒す!!」

「おいおい…門番って下っ端だろ?、一々戦ってたら吸血鬼まで持たないだろ」

「ま、まあチルノちゃんは毎回ここで負けてますから」

「はぁん」

海斗は行ってこいと目で示した
チルノもそれを察したのか大きく頷く

ある程度門に近づいたところで門番が目覚めます

「氷精、また来ましたか…おや?」

紅魔館の門番こと紅美鈴が海斗の存在に気づく

「貴方は、この前の文々。新聞に載っていた…」

「アイツの新聞読んでる奴いたのか、だがお前の相手は俺じゃないだろ」

「そうですね、今は私の責務を全うするまでです」

そう言ってチルノと向かい合う

そして二人は同時に地面を蹴り空へと浮かぶ

海斗と大妖精は参加するわけにもいかないので見守ることに徹する

「行きます!!」

先に仕掛けたのは美鈴

勢いよく脚を振り上げると虹色に輝く小型の真空波がチルノへと放たれる

チルノは慌てることなくそれを回避する

以前のチルノなら回避を考えず攻撃ばかりしていただろう

「よし!!これでもくらえ!!」

そして負けじと氷の弾幕を発射するが美鈴も真空波で相殺する

「まだまだ!!次はこれだ!!」

チルノは高々とスペルカードを掲げて宣言する

氷符「アイシクルフォール」

(やはり使ってきましたか、しかしそのスペカの弱点はお見通しです)

美鈴は一気にチルノへと接近する

安全地帯であるチルノの真正面に行く、得意の近接戦で勝負を決めるために

チルノは昨日の海斗の言葉を思い出していた

『穴を、利用する?』

海斗が言った言葉をチルノは聞き返した

『ああ、お前がアイシクルフォールを発動したときに相手は絶対にお前の真正面に来るからな、それを利用する』

『この戦法で一番重要なのは度胸だ』

『度胸?』

『とにかくビビるなってことだ、早苗と勝負してて何度も真正面から攻撃されただろ?目の前に来られても動揺する素振を見せるな、相手が調子に乗るからな』

そうして海斗の言葉通り美鈴がチルノの目の前に現れる

(来た!!)

「これで終わりです」美鈴の拳に虹色の気が集まる
しかし、その拳をぶつけるより前にチルノが動く

氷符「フェアリースピン」

「!？」

チルノが体を回転させると氷塊を含んだ竜巻が巻き起こる

至近距離まで接近していた美鈴はこれを避けることができない

「チルノちゃんすごい!!」

大妖精が声を上げて喜ぶ

「チルノ、この勝負いけるぜ」

「そう思ってる時期が俺にもあつたんだ…」

チルノと美鈴の対決は結局チルノの敗北に終わった

「私の勝ちです」

地面に尻を着くチルノに美鈴は言い放つ

「うるさい!あたいはまだ負けてない!」

「そうですね…では今日という今日は徹底的に叩きのめします」美鈴が再び脚から虹色の真空波をチルノへと放つ

まだ地面に座り込んだままのチルノには避ける術がない

しかし、真空波はチルノにかすりもせず明後日の方角へと飛んでいった

「なんのつもりですか？」

「悪いな、横槍を入れるつもりはなかったんだが気が変わった」

海斗が美鈴が放った真空波を強引な力技で蹴りあげ軌道を外したのだ

美鈴が警戒した様子で海斗をじっと見つめるがそれを無視してチルノのほうに駆け寄る

「海斗、あたい…」

「チルノ、よくやった」

「え？」

「お前は作戦通りにできたからな、負けたのは俺のせいだ」

そのうち再戦すればいい、海斗はそう言っただけでチルノを立たせる

「まだやるうってんなら次は俺が相手するぜ？」

「貴方がこの紅魔館に侵入すると言っのなら排除するまでです」

「安心しろ、こんな悪趣味の館には興味ねえよ…ただ」

「お前には少しだけ興味があるけどな」

「奇遇ですね、私も貴方とは新聞を読んだときから手合わせしてみたいと思ってました、スペルカードルではなく武人の闘いを」

「ダメですよ、いくら海斗さんでも美鈴さんは危険です」

大妖精が止めるが海斗は聞く気がない

武闘家同士が語るのに言葉は不要、二人はすでに構えをとっている

そして同時に地面蹴ると互いに距離を詰める

海斗は攻撃せず回避に専念する

（見た目通り中国拳法か）

美鈴から繰り出される乱打を的確に避ける

同じ型でも龍や詩音よりも上だということがわかる

「この連撃を全て捌くとは流石にやりますね」

「知り合いに中国拳法の使い手がいるからな」

「そうですね、ならば…！」

「！？」

海斗は距離をとる

直感的に隣接していれば危険だということを感じたからだ

美鈴はスペルカードを掲げる

彩符「極彩乱舞」美鈴が虹色の闘気を纏いながら巨大な竜巻を形成する

「何が『武人の闘い』だ！！普通にスペルカード使ってるじゃねえか」

海斗は防御体制をとりながら半ば呆れ気味で呟く

虹色の竜巻は海斗を巻き込んだ

そして竜巻が消え去ると中から二つの影が見える

「驚きました、あのスペルをまともにくらって立っていられる人間がいるなんて…」

美鈴はスペルカードルールを無視して全力で放った

妖怪である美鈴の本気の攻撃をくれば怪我だけでは済まないしかし、美鈴の目の前に立っている男が倒れる気配は全くないその男が突如ポツリと言葉を呟いた

「…面倒くせえ、やめだ」

「？」

美鈴は理解できなかった

何が面倒なのか、何をやめるのか
様々な思考を繰り返している中、突如海斗が迫る

「迅い!?!」

海斗の拳が鳩尾へと叩き込まれる

「ぐうっ!?!」

予想以上の威力に美鈴は体制を崩しそうになるが気合いで堪える
そして海斗の脇腹を目掛けて蹴りを放つ
しかし、海斗は美鈴の攻撃を無視して攻撃を続けた

美鈴は海斗の言葉を今理解した
回避することと防御することを一切行わない捨て身の戦法を選んだ
のである

美鈴は焦っていた
なぜなら鳩尾に拳を入れても蹴りを入れても海斗は怯まずに歪んだ
笑みをうかべている

(攻撃が効いてない!?!)

海斗に圧されて美鈴は次第に攻撃の手を緩めてしまう
「もう終わりか?ならこっちから行くぜ」

海斗の蹴りが美鈴の膝に入る

「おらっ!?!」

ガクンと美鈴の体制が崩れる

その隙に脚払いで美鈴の体が宙に浮き、海斗の連撃が叩き込まれる

「がはっ!?!」

美鈴は受け身も取れないまま地面に落ちる

「どうする? まだやるか?」

美鈴はフツと溜息を吐き出して

「ここで粘っても勝てないのはわかっています、今回は私の負けです」

「そうか」

海斗はそつと美鈴に手を差し出す

急に差し出された手に美鈴は少し戸惑う

「ここじゃ戦いの後には遺恨は残さないと聞いたんだが、違ったか?」

海斗の言葉に美鈴は笑みを浮かべて海斗の手を握ると海斗が引つ張り美鈴を立たせる

「俺がここまで追い詰められたのは親父以来だぜ」

「私も武術で人間に負ける日が来るとは思ってませんでしたよ、まさか私の攻撃が効かないとは」

「効いてないわけないだろ…」

そう言っつて海斗はやれやれといった表情を浮かべる
海斗は訓練によってダメー지를表情に出さないようにできるがダメー
ジを受けていないわけではない

「海斗!?!」

「海斗さん!?!」

「なんだお前ら、いたのか」

空気と化していたチルノと大妖精が近づいて来る

「海斗やっぱりすげえ!!」

言っつと同時にチルノが海斗に飛びつく

「勘弁してくれ、まだあちこちが痛えんだ」

そう言いつつ、しっかりとチルノを受け止める

「チルノ、今なら門番が動けないから中に入れるぞ」

「ちょ、ちよつと!?!」

海斗の言葉に美鈴が慌てる

「冗談だ」

「質の悪い冗談ですね、笑えませんよ……」

「そついえば自己紹介がまだでしたね、私は紅魔館の門番紅美鈴です」

「朝霧海斗だ」

「海斗さん、またいつか手合わせ願いたいです」

「気が向いたらな」

美鈴の言葉をそっけなく返すと紅魔館に背を向け歩きだそうとする

「お待ちください」

突如海斗の背後にメイド服を来た女性が現れる

第六話（後書き）

流星「やあ尊」

尊徳「なんのつもりだ、僕を後書きなんか呼び出して」

流星「だって、こうでもしないと尊の出番ないし、解説という名の言い訳を手伝って欲しいんだ」

尊徳「そんなことのために僕を呼んだのか！？それに本編じゃ僕の出番はないのか！？」

流星「では早速言い訳タイム！！」

尊徳「僕の意見は無視か！？」

流星「海斗の使っている神崎流古武術ですが、暁の護衛シリーズでどのようなスタイルなのか全く語られていません。なので海斗の戦闘スタイルは作者である僕の妄想です」

尊徳「海斗の戦闘描写は基本カットされるからな」

流星「次にチルノと美鈴が使ったスペカですが」

尊徳「氷符「フェアリースピン」と彩符「極彩乱舞」、二つとも非操天則に出て来たスペカだな」

流星「今回の言い訳はこれくらいかな」

尊徳「僕からも一つ言わせてもらおうが最近彼女の出番が減ってないか？」

流星「確かに早苗さんが空気ヒロインと化している、次話にも出番無いし」

早苗「ええー!？」

流星「いきなり出てこないでくださいよ」

早苗「それより私の出番が無いってどういづことですか!？メインヒロインって言ってたじゃないですか!？」

流星「幻想郷では常識にとらわれてはいけません(キリッ)」

早苗「それは私の持ちネタです!！」

尊徳「メインヒロインだろうと空気と化す…恐ろしい世界だ」

第七話（前書き）

遅くなって本当にすいません）。 - 人 - 。

前回にもっと早く投稿するみたいなこと宣言したのに倍以上の時間かかっていたとか…

第七話

「お待ちください」

「…あん？」

(この女…いつの間に)

海斗の背後にはいつの間にかメイド服を着た一人の女性が立っていた

「え、咲夜さん？」

「美鈴、門番の仕事を放り出して何をしてるのよ」

咲夜と呼ばれた女性が呆れた様子で溜息を吐く

「すみません、どうしても手合わせしてみたくて…」

「俺に用があつて呼び止めたんじゃないかねえのか、無駄口につき合ってる暇はないぞ」

二人の会話に海斗が口を挟む

「これは失礼しました、朝霧海斗様、貴方を客人としてこの紅魔館へ招待します」

「何でオレを？」

「主人の意向ですので理由までは存じておりません」特に断る理由

も無い、それに海斗は今まで全く興味が無かった紅魔館の主に少しだけ会ってみたくなくなった

「どうも金持ちには物好きな奴が多いな、そいつのどこまで案内頼む」

「畏まりました、そして私のことは咲夜とお呼びください」

「紅魔館のメイド長をしております、十六夜咲夜です」

咲夜はスカートの裾を掴み綺麗なお辞儀をする

「メイド長か…」

「あの…何か？」

「いや何でもない、よろしく頼む」

咲夜に続いて紅魔館の中に入った

チルノと大妖精は疲れていたためか海斗の背負われたまま眠ってしまったので適当な空き部屋で休ませている

内部は外観よりも明らかに広く、物理法則を無視しているようだった

「見た目より広いな…」

「私の能力で館の内部を広くしているためです」

「とんでもない能力だな…まるでファンタジーだ」

「朝霧様は外来人でしょうか？」

「あ？見りゃ分かるだろ…いや、そうでもないか」

人里や妖怪の山では浮きまくっている海斗の格好も、この洋風の建物である紅魔館では凄くマッチしていた

「外来人だ、今は守谷神社に住まわせてもらってる」

「やはりそうでしたか、スーツを着ている人間など幻想郷では全くと言っていいほど見ないので」

「まあ、新聞で朝霧様のことは大体は知っていたのですが」

少し微笑みながら咲夜が話す

「だったら聞くな」

「申し訳ありません、美鈴との鬪いを見ていたら本当にただの人間かどうか疑わしかったので…」

先程とは違い今度は苦笑いを浮かべている

「失礼な奴だな」

不意に咲夜が大きな扉の前で立ち止まった

「この部屋に我が主がいらっしやいます」

「はぁん」

咲夜がノックをして扉越しに声を掛ける

「お嬢様、朝霧様をお連れしました」

「入りなさい」

咲夜が扉を開け部屋の中に入ると海斗も続いて中に入る

「紅魔館へようこそ、朝霧海斗」

部屋の中に居た洋風の格好の少女が喋った

その幼い容姿からは不相応な存在感を感じる

「立ち話もなんだから座ってちょうだい」

席に着くように促されたの海斗は少女と対面の位置に座った
なぜか咲夜はいつの間にかいなくなっていた

「お前が吸血鬼ってやつか？」

「そうよ、私が紅魔館の主にして紅い悪魔、レミリア・スカーレット
トよ」

「オレのことは知ってるみたいだから自己紹介は必要ないな」

「なんでオレをここに招いた？」

「簡単なことよ、興味が沸いたから、貴方もこの私に興味があった
から会いに来たんでしょ？」

「まあな」

海斗はぶっきらぼうに返事をする。レミリアの顔を見つめる

「想像していたのと違うな」

「何のこと？」

「吸血鬼なんていうからもっとグロテスクな怪物が出てくるのかと思っただぜ」

「失礼ね」海斗の中の吸血鬼のイメージは牙や爪を尖らせ、襲い掛かる化け物だった
もはや吸血鬼ではなくゾンビである

「どちらにせよ、人間に恐れられているという点は変わりないわね、そんなことより……」

「あん？」

「美鈴に勝つなんてやるじゃない」

「またその話か……」

海斗はやれやれといった様子で背もたれに体を預ける

「弾幕のほうは弱い部類だけど格闘戦は幻想郷の中でも相当強いほうなのよ？」

「回りくどいのは嫌いなんでね、言いたいことがあるならさっさと

「言え」

「守谷神社に居候してるそうね」

「それがどうした」

「ここで働く気はない？少なくとも守谷神社よりは高待遇を約束するわ」

「買い被りすぎだ、それに俺なんか雇っても何の役に立つんだよ」

「伊達に紅魔館の主として数多くの使用人を使役しているわけじゃないわ、海斗が有能か無能かなんてすぐに分かるわよ」

「確かに咲夜や美鈴なんかを見るとお前の目は節穴ってわけじゃないさそうだな」

「優秀な人材がどれだけでも余ることはないのよ、海斗にはもう一人の門番として働いて貰おうかしら」

「ハッ、それこそ俺なんかを雇う意味が無いな」

「どついう意味？」

海斗は僅かに笑みを浮かべながら続ける

「優秀な門番がいるから俺の出る幕はねえってことだ」

「随分過大評価するのね、でも貴方はその門番に勝ったのよ？」

「まあな、だが俺が侵入者として戦ってたら結果はわからないぜ？
アイツにあつて俺には無いものがあるからな」

「門番の意地つてところかしら」

「それもあるが、従者には最も大切なものだ」

「…忠誠心ね」

「ああ、単純な強さならアイツよりは強い奴なんていくらでもいる
だろう」

「だが、紅魔館の門番という仕事においては誰よりも優秀なんじゃ
ねのか」

「意外ね、貴方からそんな言葉が出てくるなんて」

「ボディーガードって仕事をやってたからな」

ボディーガードという仕事は職業上常にプリンシパルと行動しなければならぬため少しでも気に入らない所があれば問答無用でクビにされる仕事だ

「…ふうん、まあいいわ」

レミリアはそう言うと手元にあつたベルを鳴らした

「お呼びですか？」

一瞬でレミリアの傍に咲夜が現れた

「テレポートか？」

海斗はSF小説でよく出てくる能力の名前を出してみた

「そう見えるけど全然ちがうわよ」

何故かレミリアが嬉しそうに答えた

「咲夜、海斗を紅魔館の地下まで案内してあげなさい」

「かしこまりました」

「地下になんかあるのか？」

「着くまでのお楽しみよ」

「それでは朝霧様、行きましょう」

「じゃあな」

「ええ、またいつでも来なさい」

「気が向いたらな」

レミリアに声を掛けると咲夜に続いて海斗は部屋を後にする

部屋にはレミリア一人だけになった

「朝霧海斗、不思議な人間ね、これほど打ち解けられるなんて」

レミリアは彼から何ともいえない不思議な魅力を感じていた

レミリア・スカーレットという傲慢な吸血鬼の前で初対面なのに終始粗暴な言葉遣いだったにも関わらず彼からは苛立ちも不快感も感じなかった

「ますます欲しくなってきたわ」

レミリアが怪しい笑みを浮かべ、目を輝かせる

(苛酷な運命を辿りながらも自我を壊すことなく生きているあの人間なら…もしかすると)

「時を止めてるとか？」

「え？」

「お前の能力のことだ」

「そうですね…よくお分かりになりましたね」

「それはお前がこの館を広くしてるって聞いたことを思い出してな、時間と空間は密接な関係にあると本で読んだことがある」

「なるほど、本当に本がお好きなのですね」

「まあな」

「だったら今から行く場所はとても楽しむことが出来ると思いますよ」

「期待できそうだな、それと咲夜」

「はい？」

「俺に敬語は使わなくていい」

「それはどうして？」

「なんかお前から敬語使われると違和感があるんだよな」

「…わかった、善処してみる」

「ああ、助かる」

すると二人は目的の場所に到着した

「ここよ」

咲夜はそう言って扉を開けて中に入った

「パチユリー様」

「…なに？」

咲夜が奥のほうに居た本を読んでいる少女に声を掛けた
パチュリーと呼ばれた少女は顔だけをこちらに向けた

「お嬢様が招待したお客様をお連れしました」

「レミイのお客がどうしてここに？」

「朝霧様は本が読むことがお好きなようなので」

ふと咲夜とパチュリーが海斗に視線を向けると海斗は少し感無量と
いった様子で大図書館の周囲を見回していた

「あの朝霧さ…海斗、パチュリー様に自己紹介をして」

「ん？ああ、朝霧海斗だ、外来人って奴だ」

「そう、パチュリー・ノーレッジよ」

「私は行くけどパチュリー様にあまり迷惑をかけないように」

「わかった」

咲夜はそれだけ言うと瞬時に立ち去った

（あいつら、これだけでかい図書館があることを俺に黙ってやがる
とは…）

海斗がそんなことを考えているとパチュリーが声を掛ける

「本、好きなの？」

「そうだな、オレの知識の九割は本から学んだ言っても過言じゃない」

「私と同じね、本を読めば筆者の経験が自らの知識として得られる」

「実際の経験には劣るかもしれないが短時間で得られるしな、オレにとって読書は心の栄養だ」

「…気が合うわね」

「ああ…これほど共感できる奴に会えるとは」

「せっかく図書館に来たんだから本読むでしょ？…小悪魔」

「は、はい！」

パチュリーに呼ばれて一人の少女が本棚の奥から現れた赤い髪にレミリアに似た羽が背中と頭部から生えている

「この大図書館の司書を任せている小悪魔よ」

「初めまして小悪魔です」

「そのまんまだな、それお前の名前じゃなくて種族の名称みたいだな」

「うぐっ！？」

小悪魔は核心に触れられたのか息を詰まらせる

「そんなことより海斗の本探しを手伝ってあげなさい」

「わ、わかりました、海斗さんはどんな本が読みたいのですか？」

「せっかく幻想郷まで来たんだ、ここにしか無い本がいい」

小悪魔は少しの間んぐと考え込むとパツと顔を上げ一つ提案をする

「だったら魔法学の本なんてどうですか？使えるかどうか分かりませんが」

「魔法？こつちに来て一冊だけ読んだけど魔法にもいろんな種類があるんだろ？」

「その通りですが私ができるべく簡単なのを選びますから」

「あー、じゃあ頼む」

「はい、こつちです」

（持って来てくれるんじゃないのかよ）

海斗は頭の中でだけでそつと呟いて小悪魔に着いて行った

「パチュリー様は気難しい方なのにこれほど意気投合されるなんて

驚きました」

「互いに共通点があった、それだけのことだろ」

「それもあります。海斗さんが特別だからだと思います」

「はあ？」

海斗は訳がわからないのか呆れているのか分かりにくい表情で小悪魔を見た

「私はこの紅魔館から出たことがないので数えるほどしか人間は知りませんが、海斗さんは初めて会った人とは思えないほど話しやすいんですよ」

「…パーソナルスペースって知ってるか？」

「パーソナルスペース？」

「無意識のうちに他人との間に保つ距離のことだ、オレはその距離に入っても不快に思わないって前に言われたことがあったな」

「確かにその通りかも」

「…そうかい、それよりお前一度もここから出たことないのか？」

「あ、はい パチユリー様に仕えるようになってからですが」

「それって幻想郷に来てから一度も出てないってことじゃないのか？」

「そうですね」

小悪魔はやや苦笑いしながら答えた

「出してみるか？」

「え！？それってどういう意味……」

「そのまんまの意味に決まってるだろ、オレが出してやるって言うてんだ」

「でも私が勝手なことすればパチユリー様にご迷惑が……」

「大切なのはお前がどうしたいかだ」

「私か？」

「ああ、外に出たけりゃ出ればいい、興味が無ければそれでもいい」

「すみません、今はまだ……」

「そうか、節介が過ぎたな、忘れてくれ」

「いえ、こんなことを気遣ってもらえたのは初めてなのでとても嬉しいです」

「……そうか、気が変わったらいつでも言え」

「ありがとうございます、今はやらなければならないことがあるの」

で…、ですが次の機会には必ず」

「おう」

「随分時間がかかったのね」

本を選んで戻って来るとパチュリーが本を読みながら話しかけてきた

「ずっと小悪魔が下ネタばっか言ってたからな」

パチュリーが本から目を話し小悪魔を白い目で見つめる

「え！？私そんなこと一度も言ってますん！！」

「海斗に吹き込まれたんじゃないの？」

「吹き込まれてません！」

そう…とパチュリーは一言だけ返すとすぐに本を読み出したので海斗も本を読んでみることにした

途中わからない単語も少し出てきたが隣に座っている小悪魔が（頼んでもないのに）教えてくれた

内容のほうもわかりやすかったためか海斗はサクサクと読み終えた

「どうですか、理解できましたか？」

「確実に理解出来たかは微妙だが本自体はかなり楽しめた」

「そうですか、よかったです」

「好きな本を共感してもらえるとなんか嬉しいですね」

「確かにな」

「次はどんな本を読みますか？これなんてどうですか？いや、これも面白いですし、あれも捨て難い……」

「おいおい……」

どの本を進めるかで激しく悩んでいる小悪魔

「はしゃいでるわね」

パチュリーはそんな小悪魔の様子を見て言葉を漏らした

「はしゃぐ？」

「やっぱり何か吹き込んだ？」

「大したことは言っていないが……」

「海斗さん！この本なんてどうですか？」

小悪魔が一つの本を選んで持って来た

「あー、悪いがそろそろ戻る」

「随分早いお帰りね」

「早苗に何も言わずに来たからな、機嫌を損ないかねん」

「そうですか…」

小悪魔は少し寂しそうな表情で持っていた本を棚に戻そうとする

「パチユリー、ここは図書館だろ？ だったら本を貸してくれよ」

「死ぬまで返さないなんてことは無しよ、ただでさえ本泥棒に困ってるんだから」

「これだけ大事に保管されてる本を盗むかよ」

「そう、ならいいわよ」

「悪いな、小悪魔お前の選んだ本を借りてくぜ」

「はい ちゃんと返却してくださいね」

「ああ、また来るぜ」

「ええ」

「お待ちしています」

パチユリーと小悪魔に別れを告げ大図書館を後にした

第七話（後書き）

流星「前書きでも書きましたが遅くなって本当にごめんなさい!!」

尊「失踪したと思われるもおおしくないな」

流星「だが今回はもう一つ謝らねばならぬことが…」

尊「なんだ？」

流星「海斗の一人称『俺』じゃなくて『オレ』だったー!!」

尊「そのことが…」

流星「いや、小ネタ探しに暁の護衛Wikiをページを見てたら気付いたんですよ」

尊「第一話では『オレ』になってなかったか？」

流星「あの頃は気付いていたんですよ、多分」

早苗「それはともかく本当に私の出番が無いなんて…」

流星「出番あったよ？（名前だけ）」

尊「最後のほうで出番あったな（名前だけ）」

早苗「それ出番あったって言えませんから!!」

流星「実は俺の脳内プロットには次回も出番が(r y)」

早苗「…え？なんだって？」

流星「怖いから！真顔で近づかないで！早苗さんのために次回は予定には無かった話を投下しようと思う」

早苗「私の出番は？」

流星「早苗さんメインです！そのための番外編的な話です」

早苗「なら許します」

早苗は上機嫌で立ち去った

流星「…早苗さんなんてチョロいぜ！」

尊「汚いなさすが作者きたない」

流星「それと魔理沙の登場機会を逃した気がする」

尊「もっと僕のように綿密に計画を練らないからそうなるんだ」

第八話（前編）

真夏の炎天下、守矢神社の居間で各々が全く違うことを行っていた神奈子はなぜか御柱を磨いており、諏訪子は帽子を外してしきりに帽子の中を覗いている、海斗はいつも通りというべきか、相変わらず本を読んでいる

早苗は扇風機を独占しながらポーツと空を眺めていた

「それにしても暑いですね」

「」「」「」

誰一人返事をしなかった

暑さを紛らわすために話しかけたというのに平然とシカトされたことで早苗にイライラが募る

「（・・）」

（…諏訪子様は何をしてるんだろう）

ずっと地面に置いた帽子の中を眺めている諏訪子の隣まで行き、中を覗くと

『…ケロケロ』

帽子の中を所狭しと跳び回る数匹の蛙がいた

「はあ、何かと思えばカエルですか…」

軽く溜め息を吐く早苗

「なに言ってるのさ、こんなにも可愛いんだ、一日中見ているも飽きないね」

「さすがにそれは…軽く引きます」

「そうか？オレも可愛いと思うが」

「え？」

急に会話に入ってきた海斗から意外な言葉が放たれた

「この可愛さが理解できるとは…やはり天才…」

「また解りづらいネタを…」

海斗は諏訪子の帽子の中にいる蛙に目を向ける

「手に乗せると、つい握り潰したくなるくらい可愛いよな」

海斗が凶悪な笑顔を浮かべている

「なんてこと言うのさ！？」

諏訪子は帽子を持つと海斗から距離をとった

「さすがに握り潰したいとは思わないけど少しだけ食べてみたいと

は思っね」

しめ縄の手入れをしながら神奈子が突拍子もないことを呟く

「確かに…焼いて食べると旨そうだ」

「!?!」

「私は嫌です…気持ち悪いし…」

頭にカエルの髪飾りをしている人がそんな台詞を言うのも腑に落ちないが、神奈子や海斗とは違い早苗は嫌悪感を示していた

「私のお陰でこの神社の信仰は支えられているというのに…」

諏訪子はガツクリとうなだれる

「信仰ねえ…」

海斗が疑いの眼差しを神奈子たちに向ける

「お前ら本当に信仰されてんのか？」

海斗と早苗が人里の一件を解決したことで確かに参拝客は増えたが、その件以外の参拝客を見たことが無かった

「信仰されていますよ、主にこの山の妖怪に」

「妖怪につて…人間じゃねえのかよ…」

「…」

海斗の言葉に神奈子と諏訪子は黙り込んでしまい、早苗も気まずそうにしている

(地雷でも踏んじまったのか?)

「あの…海斗さん…」

「ん？」

早苗が立ち上がり居間を出たので海斗も付いていく
部屋を出たところで早苗が口を開いた

「海斗さんには私たちは外の世界から来たことは前に教えましたよね」

「ああ」

海斗が初めて早苗と出会い守矢神社を訪れた日に教えてもらったことだった

「この幻想郷に移り住んだ理由は外の世界の人間たちを諦めたからなんです」

「人間を諦めた？」

「はい、神にとって信仰とは力の源であり、信仰がなければ存在することも出来なくなります。お二方は外の世界の人間から信仰集めることを諦め、この幻想郷にやって来ました」

「信仰が集まらない世界に留まるよりも、少しでも可能性のある幻想郷を選んだってことか」

神奈子たちにとっても苦渋の決断だったことだろう

土着神である彼女たちが自分達の土地を離れて別の場所に行くのだから

「早苗」

「はい？」

「…信仰するのは神に感謝することだったな」

「え、ええ」

「オレに考えがある」

「え？考え、ですか？」

「おう、神サマに恩を売っておくってのも悪くないな」

海斗は一旦早苗と別れ人里まで降りて来ていた

(確かこのあたりだったな)

阿求に会うために稗田邸を目指して進んでいく

「あー！お兄ちゃんだー！」

「あん？」

人里の通りにいた子どもの集団の中から海斗の傍に一人の少女が駆け寄ってきた

「誰だ…ってあのときのガキか」

以前銃をもった男に捕まっていた子だった

(解らない人は第二話参照)

「えへへ」

「その様子だと、あれから特に問題はなさそうだな」

「うん、お兄ちゃんとお姉ちゃんが助けてくれたもん！」

「そうか」

『おい』

「あ、慧音先生が呼んでる、それじゃまたね、お兄ちゃん」

少女は再び子どもたちの集団へ戻って行った

そんな子どもたちの姿をじつくりと眺めたりはせず、すぐに視線を外し、目的地へと向かい始める

「ここだったな」

海斗は阿求の家までたどり着く

そして誰にも構うことなく家の中に入っていきこうとする

「お待ちください」

「あん？」

海斗が振り返ると初老の女性がいた
服装から稗田家の使用人のようだ

「確か以前に守矢神社の方と一緒に来られた…朝霧様ですね？」

「ああ」

「阿求様に会いに来られたのですね、御案内します」

「そうか、助かる」

初老の女性は無断で稗田邸に足を踏み入れようとした海斗を警戒も咎めもせずに、にこやかな顔で迎え入れる

「阿求様は朝霧様が来られるのをずっと心待ちにしていたんですよ」

「オレを？」

「ええ…阿求様は歴史書を書いていることもあり、幻想郷の様々な場所や人物たちに自らの足で訪ねてまわっているんですが…」

「意外だな…なんていうか阿求はもっとインドア派だと思ってたんだが」

「書き物しているときはずっと部屋に籠っていらっしやいます、ですが先程も言った通り少しでも気になったら自分から会いに行こうとするんですが…」

『阿求様、そんなにそのお方が気になるのですしたらいつもみたく自分からお会いに行けばよろしいのではございませんか？』

『いいえ、海斗さんは私のところに来てくれると言ってくれました。なので私は海斗さんが来られるまでは自分からは行きません』

「変なところで頑固な人なのですよ」

初老の女性はクスクスと笑いながら話す

(…それならもっと早く来れば良かったな)

そんな考えが海斗の頭をよぎったが目の前を歩いていた女性が部屋の前で立ち止まったので海斗も合わせて立ち止まる

「阿求様、お客様をお連れしました」

襖は開けずにそのまま声を掛ける

『お客様ですか？とりあえずお入りください』

襖の奥から疑問を含んだ阿求の声が聞こえてきた
阿求の部屋へと入る

「よう」

「お客様は海斗さんでしたか」

海斗の顔を見た阿求が嬉しそうに微笑む

「では私は仕事に戻りますので、どうぞゆっくりと」

「おっ」

「ご苦労様です」

女性は阿求と海斗に頭を下げると部屋から出ていった

「今日はどうしたんですか？」

「ああ、少し聞きたいことがあってな」

「私が答えられる範囲でしたら」

「実はな……」

「「夏祭りー!?!」」

場所は変わって守矢神社

早苗が計画の主旨を神奈子と諏訪子に話していた

「はい、多くの信仰を集めるにはどうすればいいかを海斗さんと考えたところ守矢神社主催で夏祭りを開催すればもっと多くの人から

信仰を得られるはずです！」

自信満々に言う早苗に「神は啞然とする

「夏祭りなんて人里でも開かれてるじゃん」

「人里の夏祭りよりもずっと大きな規模の祭を開くんです！」

「そんな勝手なことして大丈夫なのかい？」

「そのために海斗さんが人里へ話を付けに行ってます」「…早苗にしては意外と抜目ないね、それで私たちは何をすればいいんだい？」

と神奈子と諏訪子が早苗に顔を向けると

一言余計です、とボソリと呟いてから答えた

「とくにすることはありませんよ」

早苗の言葉の意味がわからなかった神奈子と諏訪子が頭上にクエスチオンマークを浮かべる

「祭を開催するんだからいろいろと準備が必要じゃないの？」

「それは私たちの仕事じゃありませんから」

「??？」

「私たちは資金援助と敷地の提供ですから」

そう言われた二神はようやく理解した

「なるほど、つまり私たちがスポンサーになって夏祭りの規模を大きくしようってことだね？」

「はい、その通りです」

(そんな大量のお金はどこから…あ！)

神奈子は投資するための資金をどうするのだろうと考えていると一っただけ心当たりがあることを思い出す

そう、海斗が以前賽銭箱に放り込まれたとんでもない金額ことを思い出した

海斗の歓迎会を開こうとか、いろんな人を呼んで大宴会をしようだの企画はいろいろとあったのだが結局使わず仕舞いだった

「神奈子様のお考え通り海斗さんがくださったお金を使います」

「…顔に出た？」

早苗が笑いながらはいと答えた

海斗は阿求を通じて人里の責任者と夏祭りの援助について話をした
人里の責任者は以前の暴動事件のことで海斗を知っており、また願
つてもない資金援助ということもありとんとん拍子に話が進んだ
言葉を全く選ばうとしない海斗に代わって阿求が説明を挟んだりし
たお陰でもあるのだが

「守矢神社の皆様のお陰でも今年は例年にない規模の夏祭りになり
そうです」

「そうか」

「歴史書に過去一番の夏祭り」と記載することが今から楽しみです」
話し合いを終えて外へと出た阿求が嬉しそうに言った
海斗は一言だけで返事すると歩幅が短くゆっくりと歩いている阿求
に合わせて遅めに歩く
その様子を見て阿求は海斗の顔を見つめていた

視線に気づいた海斗が顔を向けると慌てて違う方向に顔を戻す

「ん？顔になんか着いてるのか？」

「額に肉って書かれています」

「マジで！？」

「…じよ、冗談です」

海斗よりも冗談を言った阿求のほうに驚いていた

基本冷静というか冷めているような反応が多い海斗がこのような照れ隠しのために言った稚拙な冗談に反応するとは思えなかったからだ

「なんだ冗談か」

本気で額を指で擦り確認しようとしていた海斗だが再び阿求に合わせて歩きはじめる

「海斗さんって見た目よりずっと優しいんですね……」

「そうか？」

「ええ、今だって私に合わせて歩いてくれますし」

「それは職業病というやつだ」

「それに何も言わずとも私を家まで送ってくれていますし」

「まあ、散々面倒かけたからな」

「……なんとなく早苗さんの気持ちが解ったような気がします／＼／＼（素っ気ないように見えてさりげなく優しい……このギャップは反則です……）」

阿求が聞き取れないような小さな声で呟く

「何だって？」

「い、いえ何でもないです」

話している間に稗田邸へとたどり着く

「悪かったな、関係ないことに付き合わせて」

「いえ、こちらこそありがとうございます。人里に住む一人の住人としてお礼を申し上げます」阿求が嬉しそうに、尚且つしっかりとした顔つきで礼を言った

その顔は妙に大人びていた

もともと性格や言動から見た目よりも大人の印象がある阿求だったが今は普段よりもさらにしっかりと見えた
もはや少女というよりは女性という方が似合う

「ああ…じゃあな」

「あ、あの…」

「ん？」

「か、海斗さん、もし良ければ、その」

先程の大人びた雰囲気はどこへやら阿求の顔を少しだけ紅潮させて、オドオドしている様子は見た目相応の少女そのものだった

「私と一緒に、な…」

「な？」

「私と一緒に夏祭りに行っ」

「阿求殿ー！！」

少し大きめの声が響き渡り阿求の言葉が遮られる

二人とも声のした方向に顔を向けると青いワンピースのような服装にダ ワハウスのような帽子を被った女性がいた

海斗は女性のほうを見た

「慧音先生、授業はもう終わったのですか？」

話を中断させられた為か僅かにダークな雰囲気が出ている

それはほんの僅かな違いのためさっきまで一緒にいた海斗しか気づかなかった

「ええ、先程終わったところです」

「授業？」

疑問に思ったことを海斗は声に出した

「ええ、慧音先生は寺子屋の教師をしているんですよ」

僅かに感じたダークな雰囲気は完全に消え去っており普段の雰囲気

に戻った阿求が答えた

「慧音先生はもう知っていると思います。が例の事件を早苗さんと一緒に解決してください。さうした朝霧海斗さんです」

「朝霧海斗だ」

「私は上白沢慧音、阿求殿が言った通り寺子屋の教師をしている、海斗殿が助けてくださった者は私の生徒だ、貴殿には本当に感謝している」

「そう思うのなら守矢神社に賽銭でも入れてくれ、そのほうがオレも早苗も喜ぶ」

「そうだな、そのうち参らせて貰おう、それと私のことは慧音と呼んでくれ」

「ならオレのことは海斗でいい」

「それでは海斗、阿求殿、私はこれで」

「もう行くのですか？」

「ええ、私は海斗にどうしても一言礼が言いたかっただけなので、そう言っただけで慧音は去ってしまった」

「しかし、諏訪子といい慧音といい幻想郷では変な帽子が流行ってんのか？」

「流行ってないとおもいますが…」

「そついえば何か言おうとしてなかったか？」

「え？あ、いや、その…何でもないです」

「そつか」

阿求ははあーっと大きなため息を吐いた

「うーん…やっぱり失敗だったかな」

早苗は考え事をしていた

「おい早苗ー」

「人里の一件で海斗さんはかなり注目されてたから、もしかしたら他の誰かに誘われてるかも…やっぱり人里には私が行くべきでした…」

「早苗ってば」

「あ、諏訪子様どうかされましたか？」

「んー、なんか悩んでたみたいだから助言でもしてあげようと思っ
てね」

「諏訪子様が、ですか…？」
「いかにも不満そうな声を漏らす早苗」

「うん、早苗の悩みはどうせ海斗のことでしょ？」

「！？（ギクッ）」

「夏祭りを一緒に回りたいけど良い誘いかたが思い浮かばない」

「…はい、その通りです」

「自分から誘うより誘われる女になれ！って言いたいとこだけど可愛い早苗のためだからね、女としての大先輩としてアドバイスしてあげよう」

「ありがとうございます！諏訪子様！」

「いい？なるべく親しみが持てるような誘い方をしなきゃダメだよ」

「親しみ？」

「そう、お願いするような誘い方じゃなくもつと自然に誘うこと」

ううんと腕を組み俯いて考える早苗

「あっ！」

何か閃いたのか勢いよく顔を上げる

「閃いたみたいだね、タイミングよく（都合よく）海斗も帰ってきたみたいだし、誘っておいで」

空気を読んだとしか思えないような絶妙なタイミングで帰ってきた海斗を指差して早苗に言った

「まさにお約束ですね」

「そんなことはいいから早く行く！」

諏訪子は早苗の背中を押して強引に行かせた

「か、海斗さん、お帰りなさい」

「おっ」

「話し合いの結果はどうでしたか…?」

「ああ、問題なしだ、後は向こうと神奈子たちに任せてもいいと思っ
つぜ」

「そうですか…そ、そういえば海斗さんって今まで夏祭りに行った
ことないんですね?」

「ああ、そうだな」

「じゃ、じゃあ私がいろいろと案内しますよ!それにせっかくだから海斗さん
もスーツじゃなくて浴衣を着ましょう!ねっ?」

「珍しく強引だな、だが…楽しみにしてるぜ」

海斗は爽やかな笑顔で答えた

「は、はい…」

早苗が答えると海斗は自室へ向かって行った

「海斗さんの…あの笑顔…」

先程の海斗の顔を思い出すと自然と顔が熱くなるのを感じた

早苗の胸の高まりはしばらく収まりそう無かった

第八話（前編）（後書き）

流星「遅くなったたうえにこの低クオリティ…本当にすみませんでした！！（土下座）」

尊「言い訳があるなら聴こうか」

流星「7月中はテスト、夏休みに入ってからバイト始めようと思っ
ているんなトコに応募してみたりとかしてただよ！遊んでたわけ
じゃないよ、本当だよ」

尊「で？結果はどうだったんだ」

流星「全部落ちた＼（＾o＾）／」

尊「救いようがないな」

流星「それともう一つ謝りたいことが…」

尊「今度は何だ!？」

流星「前話で守矢を守谷と間違えるというところでもないミスをして
しまいました、本当にすみませんm(_____)m」

尊「それはそうと次話はもっと早く投稿できるのだろうな？」

流星「そりゃあ流石に今回より間空くなんてことは…きつとない!」

尊「なんだその曖昧な言い方は!ちゃんと断言しろ!」

流星「いやあ、最近モンスターファーム2にハマっちゃってもしかしたら」

尊「北斗有情破顔拳！」

テレッテー

流星「ギヤアアアツ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328/>

東方護衛録

2011年3月20日20時57分発行